女高遺跡・行人塚古墳

（めだか　ぎょうにんづか）

発掘調査報告書

1990

掛川市教育委員会

序

真赤な太陽が縹渺とした和田岡原の芽吹きはじめた茶畑に沈むさまは、掛川の西域の代表的な農村風景であり、限りなく心に深遠な思いを抱かせます。

北方の山稜から南にのびる広々とした河岸段丘から成る和田岡原地域は、水の便もよく、地味も肥沃なことから農耕に適しており、重要な遺跡が包蔵されていることでひろく知られております。既に原始時代には大規模な集落が営まれおりました。その後、長い年月を経た今日まで茶生産を主とした農業地域として発展してきましたが、近年の経済、社会構造の変化は茶産業はもちろんのこと、農業基盤そのものにも影響がみられ、地政的条件に恵まれていることと相俟って急激に変貌しつつあります。

広大な茶園全体が重要な遺跡包蔵地となっているこれらの地域を、文化財保護の面からみると、前方後円墳群をはじめとして遺跡の保存と発掘調査は、地域の人々の文化遺産に対する深い理解と献身的協力によって今日までささえられてきたといっても過言ではありません。

このような状況をふまえ、このたびの発掘調査は、高田地区の行人塚古墳の北側に位置する女高遺跡がその対象となり、周到な準備と土地所有者の深い理解によって実施されました。発掘調査は慎重に行われ、その結果、弥生期の住居跡群、古墳期の方墳の同溝などが明かとなり、弥生時代から近世に及ぶ集落の様子や葬制を解きあかす貴重な資料を得ることができました。

私たちは、原始時代からの歴史文化の基盤のうえに成り立っていることをしっかりと認識して、豊かな自然環境を保全しつつ、地道な発掘調査の成果が潤いのあるまちづくりに活かされることを切に願うものであります。

最後に本書の刊行にあたり、関係者各位のご指導に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成２年３月

掛川市教育委員会
教育長　西ケ谷免志雄

例　　言

1．本書は、平成元年７月13日から平成２年３月31日まで実施した静岡県掛川市吉岡字女高1,190外に所在する女高遺跡・行人塚古墳の発掘調査報告書である。

2．調査は、女高遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたり、土地所有者の大場良松氏をはじめ周辺の土地所有者の方々には、文化財保護に対し深いご理解とご協力を頂いた。

4．発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当した。

5．発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。

　鈴木辰江・鈴木きの・村松さと・鈴木はつ子・宮崎充子・鈴木きよし・上村のり子・小沢ろく・久保田まさ・萩田みさ子・萩田ちか・萩田ちさ子・牧野すみ江・豊田八重子・鳥居鈴江・松浦せい子・榛葉豊子

6．本書作成にあたり、次の方からご教示・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

　平野吾郎・吉岡伸夫・渋谷昌彦・松井一明

7．本書作成にあたり掛川市教育委員会の前田庄一・戸塚和美ならびに市内在住の大熊茂広君の協力を得た。遺構のトレースと鉄器の実測と執筆を前田が、土器・鉄器の実測・トレース・遺物の執筆・遺構のトレースを戸塚が、そして遺構のトレースを大熊がそれぞれ行い、本書の編集・執筆を松本が行った。

8．発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長西ヶ谷兎志雄、社会教育課長安達啓、社会教育課専門官岩井克允のもとに社会教育課が所管した。

9．調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．挿図における方位は、磁方位を示す。(1989年７月現在)

2．本書で使用した遺構名称は、次の意味である。

　ＳＢ：竪穴住居跡ＳＤ：溝状遺構ＳＦ：土壙ＳＰ：小穴（ピット）ＳＲ：道状遺構

3．本書で使用した遺構番号は、現地調査時に呼称した番号をそのまま使用した。

4．遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目　　次

序　文
例　言
凡　例

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要 …… 2
1．調査に至る経緯と調査の目的 …… 2
2．調査の方法と経過 …… 2
3．遺跡をめぐる環境 …… 4

Ⅱ　調査の内容 …… 7
1．遺　構 …… 7
(i)　竪穴住居跡 …… 7
(ii)　土　　壙 …… 12
(iii)　小　　穴 …… 12
(iv)　溝状遺構 …… 14
2．遺　物
(i)　土　　器 …… 20
(ii)　鉄 製 品 …… 21
(iii)　古　　銭 …… 21

Ⅲ　ま　と　め …… 26

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 1
第２図　遺跡の周辺地形図 …… 3
第３図　女高遺跡検出遺構全体図 …… 5・6
第４図　遺構全体図 …… 8
第５図　ＳＢ０１・ＳＢ０２実測図 …… 9
第６図　ＳＢ０４実測図（１） …… 10
第７図　ＳＢ０４実測図（２） …… 11
第８図　ＳＦ０１・ＳＰ１２４・ＳＰ１８３実測図 …… 13
第９図　ＳＤ０１実測図 …… 15
第10図　ＳＤ０３土層断面図 …… 16
第11図　ＳＤ０５・ＳＤ０６平面実測図 …… 17
第12図　ＳＤ０５・ＳＤ０６実測図 …… 18
第13図　ＳＤ０７実測図 …… 19
第14図　出土土器実測図（１） …… 22
第15図　出土土器実測図（２） …… 23
第16図　出土土器実測図（３） …… 24
第17図　出土遺物実測図 …… 25

図　版　目　次

図版Ⅰ　上　調査前近景（北西から）
　　下　調査風景各種
図版Ⅱ　上　南調査区全景（北から）
　　下　南調査区全景（西から）
図版Ⅲ　上　北調査区全景（南から）
　　下　北調査区全景（北から）
図版Ⅳ　上　重機による埋戻し
　　中　ＳＢ０１・ＳＢ０２（北東から）
　　下　ＳＢ０１遺物出土状況
図版Ⅴ　上　ＳＢ０４遺物出土状況（南から）
　　中　ＳＢ０４完掘（南から）
　　下左　ＳＢ０４遺物出土状況
　　下右　ＳＢ０４遺物出土状況
図版Ⅵ　上　ＳＢ０４炉
　　中　ＳＢ０４炉（断面）
　　下　ＳＢ０４炉（完掘）
図版Ⅶ　上　ＳＦ０１遺物出土状況（北から）
　　中　ＳＦ０１完掘（東から）
　　下　ＳＰ１２４遺物出土状況（東から）
図版Ⅷ　上　ＳＰ１２４完掘（東から）
　　中　ＳＰ１８３遺物出土状況（北から）
　　下　ＳＰ１８３完掘（北から）
図版Ⅸ　上　ＳＤ０１完掘（北から）
　　中　ＳＤ０３完掘（南から）
　　下　ＳＤ０７完掘（南から）
図版Ⅹ　上　ＳＤ０５・ＳＤ０６遺物出土状況（東から）
　　中　ＳＤ０５遺物出土状況
　　下　ＳＤ０５・ＳＤ０６完掘（東から）
図版ⅩⅠ　出土遺物（１）
図版ⅩⅡ　出土遺物（２）
図版ⅩⅢ　出土遺物（３）
図版ⅩⅣ　出土遺物（４）

1．女高遺跡　2．八海山　3．又太郎　4．長福寺西　5．古城　6．後藤ヶ谷　7．中山　8．城ノ腰　9．東原　10．今坂　11．溝ノ口　12．高田上ノ段　13．吉岡下ノ段　14．吉岡原　15．瀬戸山Ⅱ　16．瀬戸山Ⅰ　17．花ノ腰　18．瀬戸山Ⅲ　19．高田　20．平田ヶ谷　21．石原沢　22．境前　23．東山　24．金鋳原（久能山）　25．陣屋北　26．殿ノ台　27．岡津原Ⅰ　28．二反田　29．本郷の横穴群　30．吉岡大塚古墳　31．春林院古墳　32．行人塚古墳　33．瓢塚古墳　34．各和金塚古墳　35．長福寺古墳群　36．吉岡下ノ段古墳群　37．吉岡原古墳群　38．東登口古墳群　39．谷房ヶ谷

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1．調査に至る経緯と調査の目的

女高遺跡が所在する和田岡原（各和原・高田原・吉岡原）には、直径30mの円墳春林院古墳・全長40～60mを越える前方後円墳大塚古墳・瓢塚古墳・各和金塚古墳・行人塚古墳に代表される和田岡古墳群が存在する。それ故女高遺跡の周辺には、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が集中して存在する（第1図・第2図参照）。

これら遺跡地の多くは現在茶畑として利用されているが、近年しばしば茶園改植（茶の品種改良に伴い、畑の水はけをよくするために地表土と地山土とを転換するいわゆる“天地返し”が行われることが多い）により、遺跡の一部に思わぬ被害をもたらす事態が生じている。

掛川市教育委員会では、茶園改植に伴い消滅の免れない状況となった遺跡に対し、せめてもの措置として、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を実施している。

今回調査の対象となった地点でも茶園改植の計画があがり、遺跡の記録保存を目的として、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。ただし本地点では、行人塚古墳の周溝部分について“天地返し”を行わない状態で改植をすることとなり、現状で保存されている。

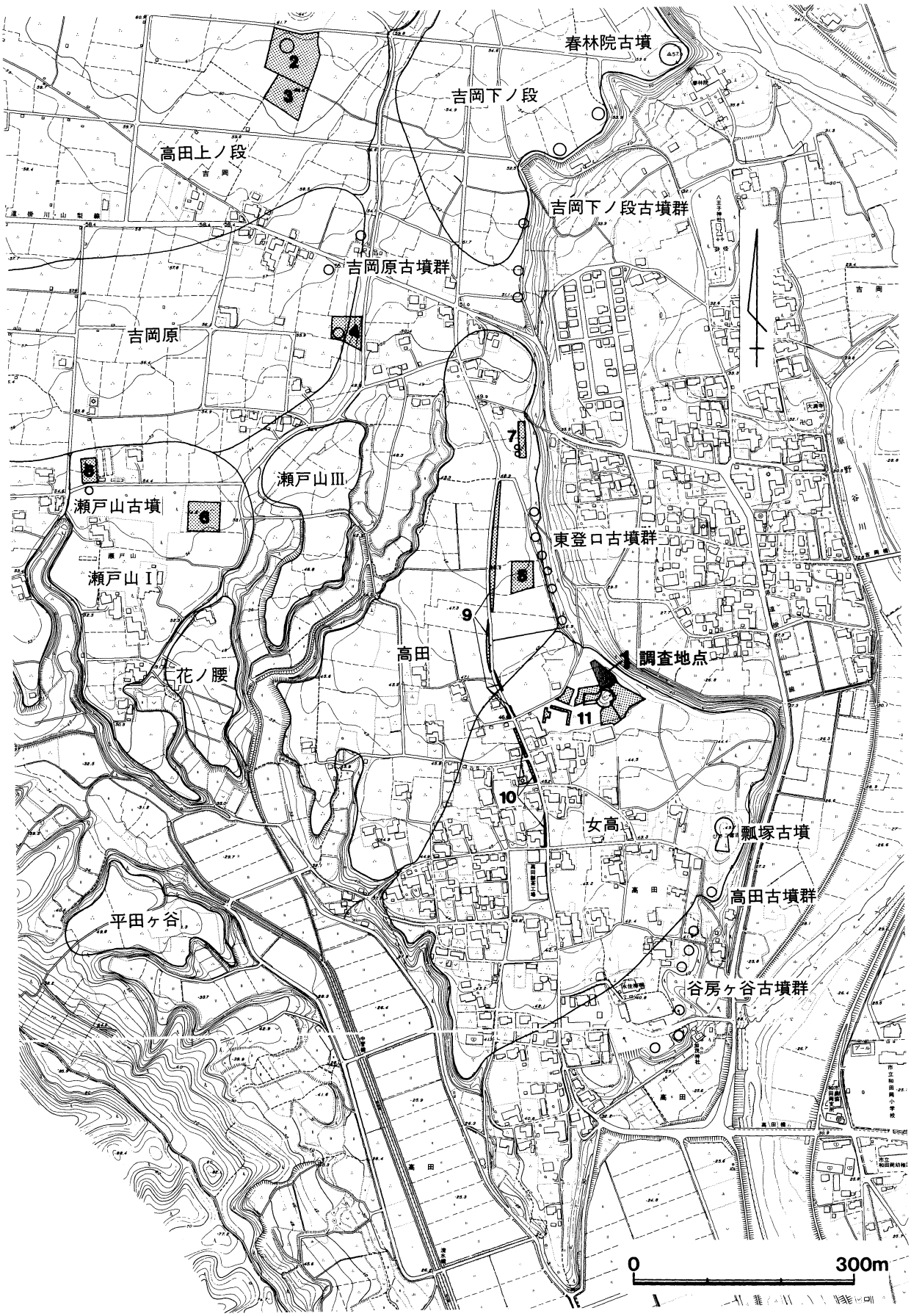
2．調査の方法と経過

今回の調査区画は、昭和57年度・昭和59年度実施時の区画に合わせ設定する予定であったが現地で当時の基本杭を見いだすことができなかったので、南側の地境を新たな基本線とし調査地内に5m方眼の区画を設けた。設定した区画の南北線は、N－27°24′00″－Wである。調査では、この区画に従い遺物の取り上げ・遺構の検出位置・図面作成等を行った。

現地での図面は、遺構全体図については20分の1縮尺、主たる遺構ならびに遺物出土状況の平面図等は10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、ブローニーサイズ（6×7）原画白黒・35㎜サイズ原画白黒・リバーサル撮影によった。

調査は、まず重機による茶樹抜根を行った後、人工により茶樹焼却除去・行人塚古墳周溝の規模・保存状況の確認を行った。その結果に基づき、重機による耕作土の除去を行い、続いて人工による掘削作業に入った。以下、日を追いながら調査経過を記述する。尚、調査は排土置きの関係から、調査区を南北2分割し行った。

平成元年7月13日	重機による茶樹抜根
7月18日～7月22日	茶樹焼却、行人塚古墳周溝規模・保存状況の確認
7月24日～7月25日	重機による南調査区の掘削
7月24日～10月3日	人工による荒掘削・精査・遺構確認・遺構掘削・写真撮影・図面作成・調査区内の片付け
10月3日～10月6日	重機による埋戻し・北調査区の掘削
10月4日～10月30日	人工による荒掘削・精査・遺構確認・遺構掘削・写真撮影・図面作成・発掘調査器材の片付け・撤収



第2図　遺跡の周辺地形図

11月９日～11月10日　重機による埋戻し・全体の整地作業を行い現地での作業を終了

３．遺跡をめぐる環境

女高遺跡の所在する和田岡原は、東側に流れる原野谷川により形成された河岸段丘である。この河岸段丘面を観ると、大きく二つの段丘面に分かれていることがわかる。和田岡原の内吉岡原と呼ばれる段丘面が上の段、高田原と呼ばれる段丘面が下の段である。標高値でみると、上の段丘面は60m～50m代、下の段丘面は50m～40m代を測る。さらに細かく観ると、上の段丘面は北から南へと緩やかに傾斜するものの、等高線の粗密から60m前後と、57m前後に小さな段差が認められる。下の段では50m代で一つ、47m前後で一つ、45m前後で一つと数段の段差が確認できる。

さてこの段丘面から少し目を離し西側を観ると、南から北方向に入り込む大きな谷とそれから枝分かれする幾本もの小谷が、吉岡原と高田原に入り込んでいることがわかる。

また、高田原の北東側（原野谷川と高田原に挟まれた部分で、現在の吉岡の集落地）には、原野谷川の自然堤防に保護された肥沃な水田面が広がっていることも見える。

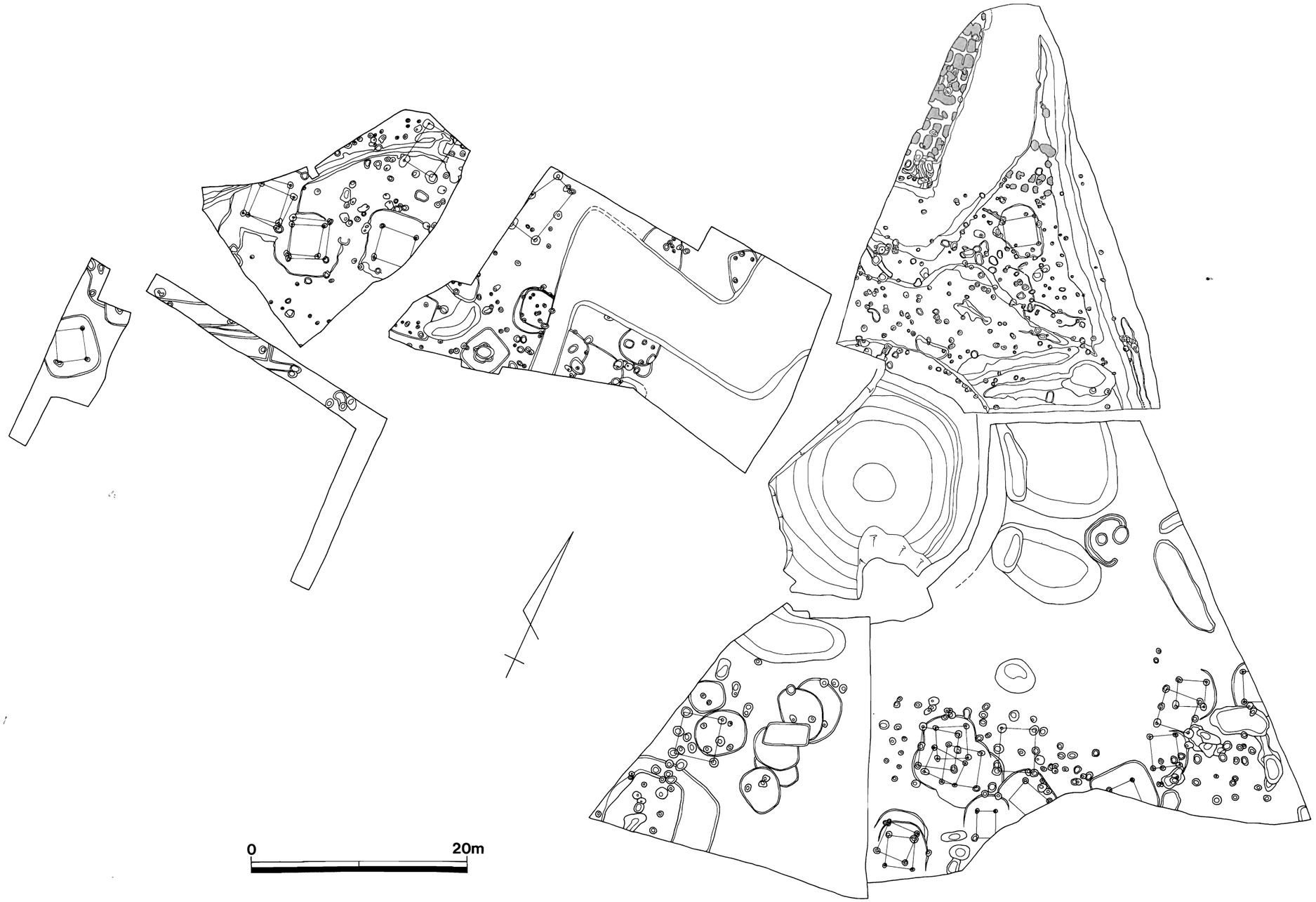
上述した三つの地形条件は、女高遺跡をはじめとする和田岡原の遺跡群を育ませた大きな条件の一つであったと考えられる。

次に和田岡原に分布する遺跡の状況について、第１図と第２図とによって観てみたい。図中では、今回の調査で明かとなった遺跡の営まれた時代、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡・遺物散布地と現在知り得る古墳の分布状況を示した。特に第２図中には、これまでに行った発掘調査で当該時期の遺跡であることを確認した調査地点も書き加えた。説明すると、１は本調査地点で、後述するように弥生時代後期の住居跡１軒と方形状の古墳１基の発見があった。これまでの女高遺跡の調査では、30数軒の住居跡と10棟ほどの掘立柱建物跡を確認している。２・３は、昭和60年度・昭和61年度に行った高田上ノ段遺跡調査地点である。この調査では、１軒の住居跡を確認したのみであったが、集落としては東側段丘縁辺部に広がりを持つであろうことが想定された。同地点からは直径１３ｍを測る円墳の跡も確認している。４は、昭和61年度行った吉岡原の調査地点で住居跡６軒と掘立柱建物跡１棟、そして方形に近い形の古墳の跡と土壙墓３基も確認している。５・６は、昭和61年度行った瀬戸山Ｉ遺跡の調査地点で、11軒の住居跡と５棟の掘立柱建物跡を群集した状況で確認している。７～９は、昭和62年度・平成元年度に行った高田遺跡の調査地点で20数軒の住居跡と数棟の掘立柱建物跡を検出、さらに一辺10m近くある方形状の古墳１基と直径５ｍ程の小円墳２基等を確認している。

以上これまでに行った調査の状況と地形状況とを合わせまとめてみると、①弥生時代後期から古墳時代前期に亙り営まれた集落跡は、和田岡原内陸部より比較的段丘縁辺部付近に広がりをみる。②なおかつ東側縁辺部では、現在の吉岡の集落地を見おろす一帯に、また西側では南から入り込む谷の両側縁辺部で西の大きな谷を見守る一帯に集落は形成されている（のではないだろうか）。③調査により発見された古墳痕と、現在確認できている古墳の立地を観ると段丘縁辺部に築造している。④これまでの調査では、和田岡古墳群を構成する墓跡形態として前方後円墳・方墳・円墳・小円墳・土壙墓など様々な形態を確認している。

これらの状況は、和田岡古墳群が現存する古墳群の構成状況よりも予想をはるかに越えた大きな古墳群であったことを想像させるものであり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた集落が多くあったが故に大きな古墳群が形成されたのである。

そうした、大きな集団の一員として女高遺跡が位置付られる。



第 3 図　女高遺跡検出遺構全体図

II　調査の内容

これまでの女高遺跡の発掘調査を振り返り、今回の調査では行人塚古墳の後円部周溝の確認・集落遺跡としての住居跡や掘立柱建物跡のあり方がどのような形で検出されるかが焦点であった。結果それを上回るものとして、ＳＤ０７から想定される（一辺18mを越える）方形状の古墳の発見があった。この発見は、現状で確認できる古墳の数よりも相当多くの古墳がその墳丘を削り落とされた形で土中に埋もれていることを意味するもので、行人塚古墳を始めとする和田岡古墳群の実態が予想をはるかに上回る大きな古墳群であった可能性を示すものである。

また出土遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にほぼ限られ時代幅はないが、過去の調査のものと比較して集落史としての遺跡の動態を探るうえでの良い資料を得たと考えている。

その具体的な内容について、以下遺構と遺物に分け報告していく。

１．遺　構（第４図～第13図参照）

今回の調査で確かなものとして確認した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期に属する竪穴住居跡１軒・溝状遺構２条、古墳時代（おそらく中期）に属する溝２条（いづれも古墳に伴う周溝）、そして近世遺構の土壙墓１基・道状遺構１条があげられる。

この項では、竪穴住居跡・土壙・小穴・溝状遺構の順に説明を加えていく。ただし、その後の整理作業の中で考えた結果性格を異にするものがあるが、とりあえず調査時に扱った遺構名称で報告し文中で否定することとした。

(i) 竪穴住居跡

ＳＢ０１（第５図参照）

Ｄ～Ｅ－３区に検出。東側でＳＢ０２と切合い、南側で行人塚古墳周溝に削平されていた。よって、平面形・規模等は不明。北側での確認面からの深さは、35cm前後を測る。覆土は、上層が黒色土・下層が暗褐色土で構成されていた。出土遺物は、第14図１～７に示した土器破片で、総じて古式土師器である。

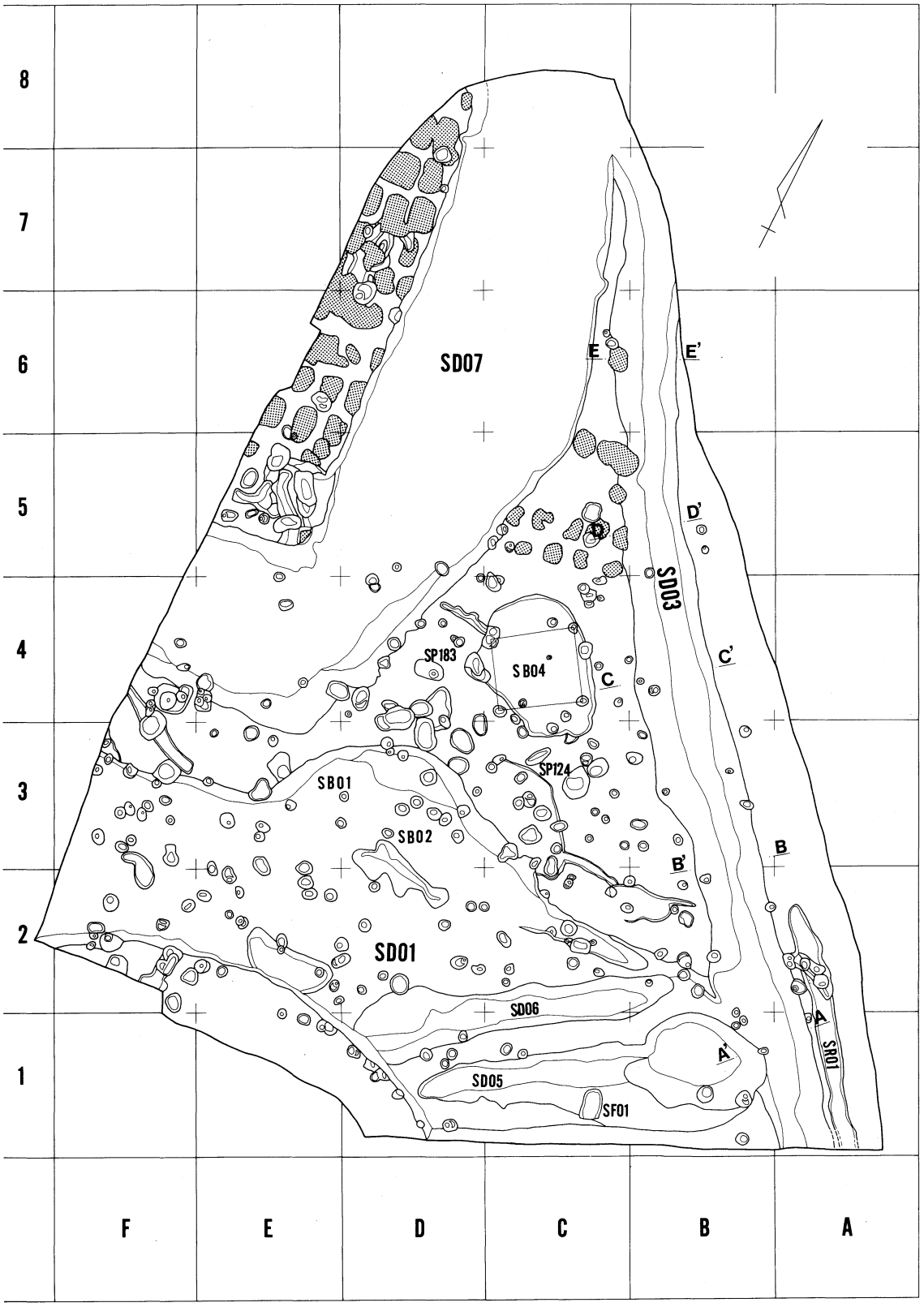
尚、ＳＢ０１では貼床状の面や炉もを確認できず、さらには柱穴として断言できるPitも確認できなかったことから、ＳＢ０１を積極的に住居跡として断定できない。

ＳＢ０２（第５図参照）

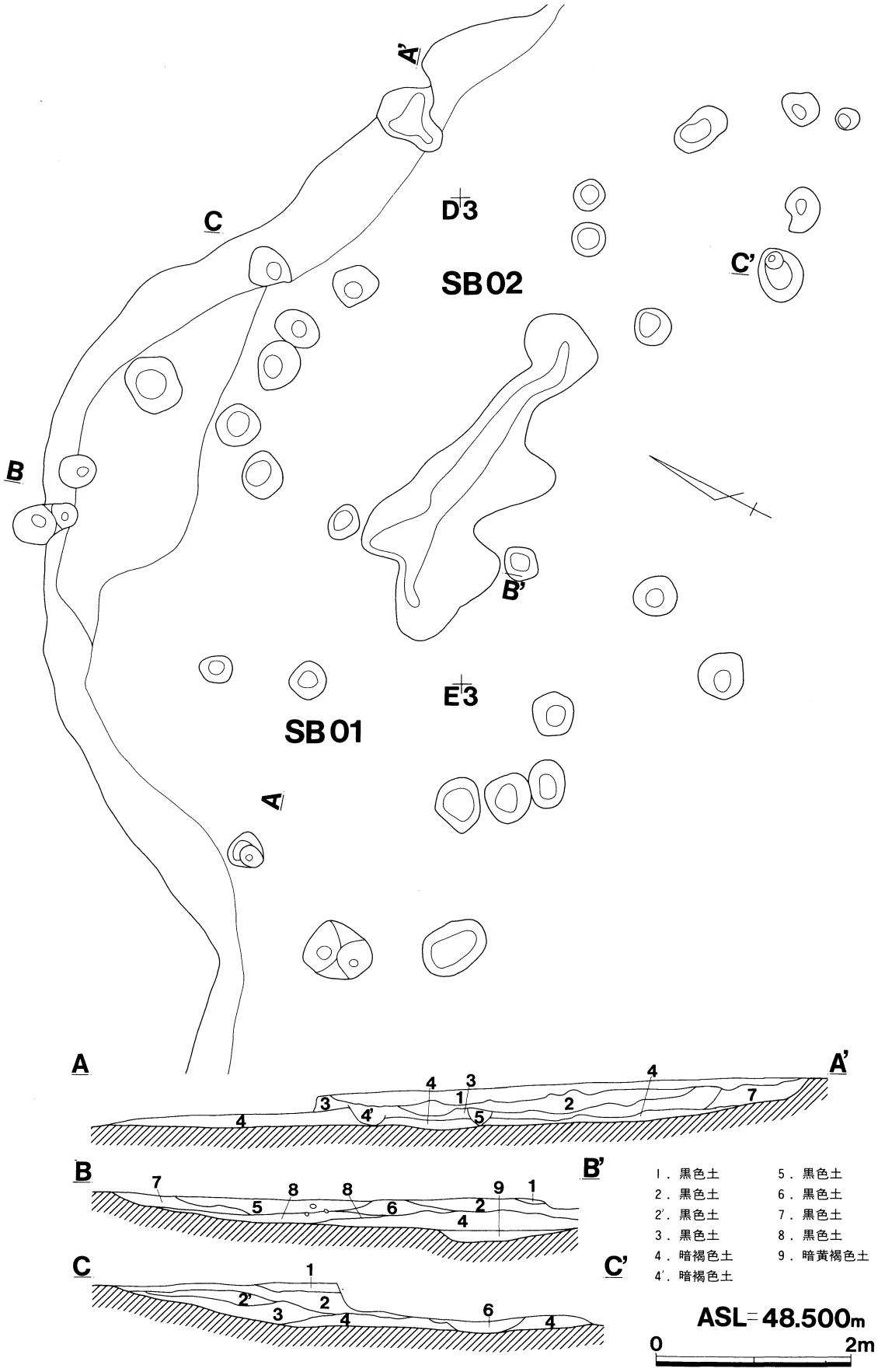
Ｃ～Ｄ－２～３区に検出。西側でＳＢ０１と切合い、南側で行人塚古墳周溝に削平されていた。よって、平面形・規模等は不明。北側ないしは東側での確認面からの深さは、30cm前後を測る。覆土は、上層が黒色土・下層が暗褐色土で構成されていた。出土遺物は、第14図８～10、第17図１の鉄製品である。ＳＢ０１同様、古式土師器である。

ＳＢ０２でもまた、貼床のような住居跡床面は確認できず、明確な炉も柱穴も確認できなかった。したがって、ＳＢ０２も住居跡として断定できない。

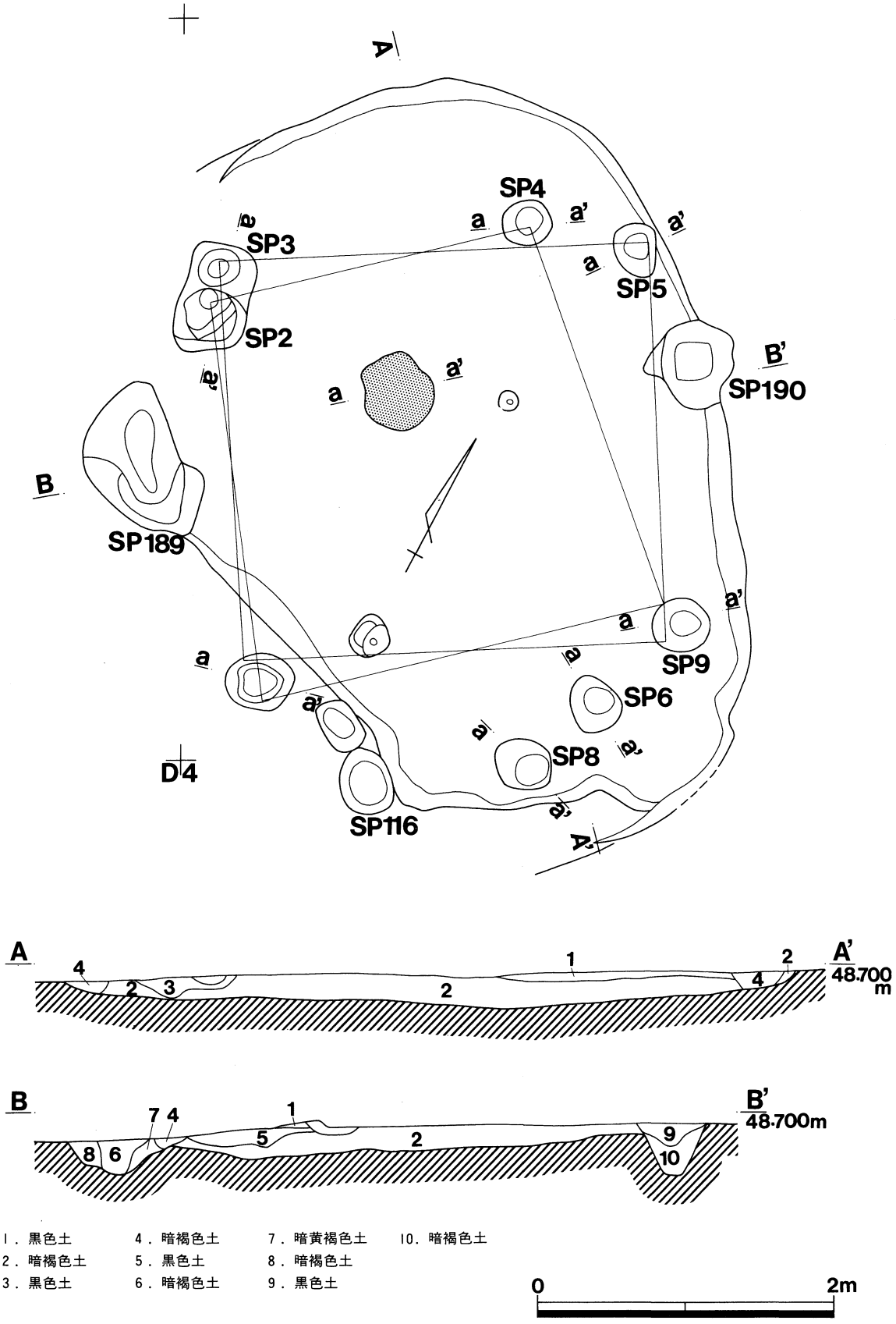
尚土層観察から、ＳＢ０１のほうがＳＢ０２よりも新しく構築されたものであることが確認できている。いずれにしても、行人塚古墳よりは古い。


8
7
6
5
4
3
2
1
F
E
D
C
B
A
SD07
E
E'
D'
SD03
C'
SP183
SB04
C
SP124
SB01
SB02
B'
B
SD01
SD06
A'
A
SR01
SD05
SF01
0
10m

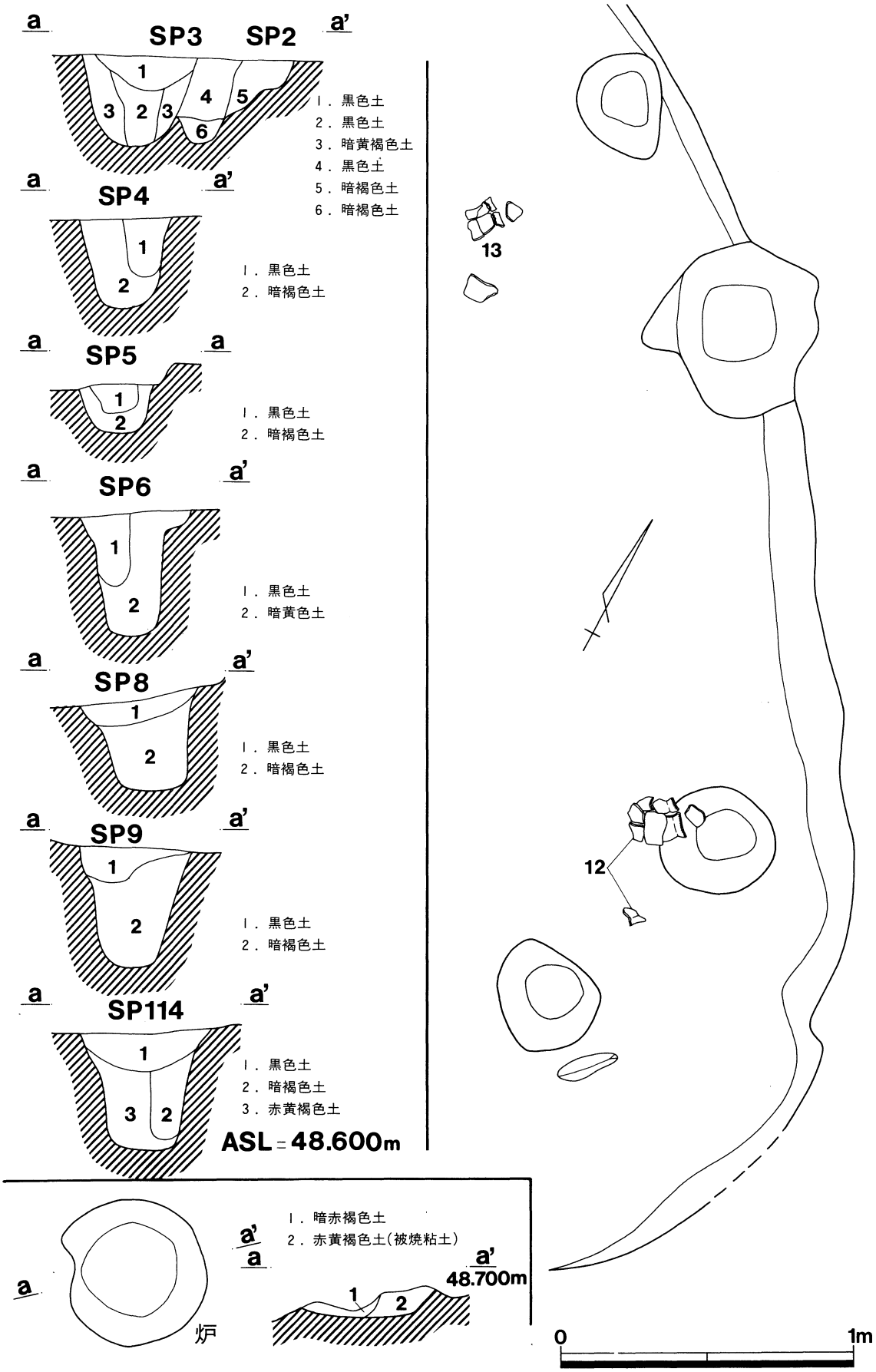
第 4 図　遺構全体図



第5図　ＳＢ０１・ＳＢ０２実測図



第6図　ＳＢ０４実測図(1)



第７図　ＳＢ０４実測図(2)

ＳＢ０４（第６図・第７図参照）

主にＣ－３～４区に検出。住居跡の南西部分を削り取られた状況で検出した。

平面の形状は、楕円形を呈しており、その規模は長径５ｍ40cm・短径４ｍ強の大きさを測る。壁溝は、平面では確認できなかったが、断面にてそれらしき落込みを確認している。床は、ロームブロックを含む叩きの施された貼床土で形成されていた。ただし、南西部は削平により消失していた。炉は、住居跡の東西柱穴間を通る中心線上の中央からやや北寄りの位置に検出。炉は、床面上に作られており、不整円形で直径約50cmを測る（第７図下図参照）。主柱穴は、ＳＰ２－ＳＰ４－ＳＰ９－ＳＰ１１４の組合せが一つと、ＳＰ３－ＳＰ５－ＳＰ９－ＳＰ１１４の組合せが想定される。前者の中心線の磁方位はＮ－約４２°－Ｗで、後者の磁方位はＮ－約30°－Ｗでやや向きが異なる。尚、検出した炉の位置等から、前者の組合せ方による住居跡が後者の組合せによる住居跡よりも新しいものと判断している。

出土遺物は第14図11～14であるが、第 7図に示したように12が貼床土内からＳＰ９に触れる位置から出土しており、13が覆土内住居跡北東壁近くから出土している。住居跡の構築時期は、概ね弥生時代後期と考えている。

(ii) 土　壙

ＳＦ０１（第８図参照）

Ｃ－１区、ＳＤ０１（行人塚古墳後円部周溝）覆土中に検出。平面の形状は長楕円であるが、確認面からの深さが４cmと浅いので、実際には長方形に掘られた可能性がある。掘り方規模は、長径100cm・短径70cm・確認面からの深さ４cmを測る。長軸方位は、Ｎ－１７°－Ｗを測る。

土壙内の土には炭化物・灰等が含まれており、出土した遺物には骨片・かわらけ（第16図69～71）がある。

付近から宋銭（第17図）が出土していることから、ＳＦ０１もまた江戸時代の土壙墓と考えられる。

(iii) 小　穴

ＳＰ１２４（第８図参照）

Ｃ－３区に検出。ＳＢ０４の南側に位置する。

平面の形状は不整楕円形で、その規模は長径120cm・短径85cm・確認面からの深さ20～25cmを測る。長軸方位は、Ｎ－４°－Ｗを測る。

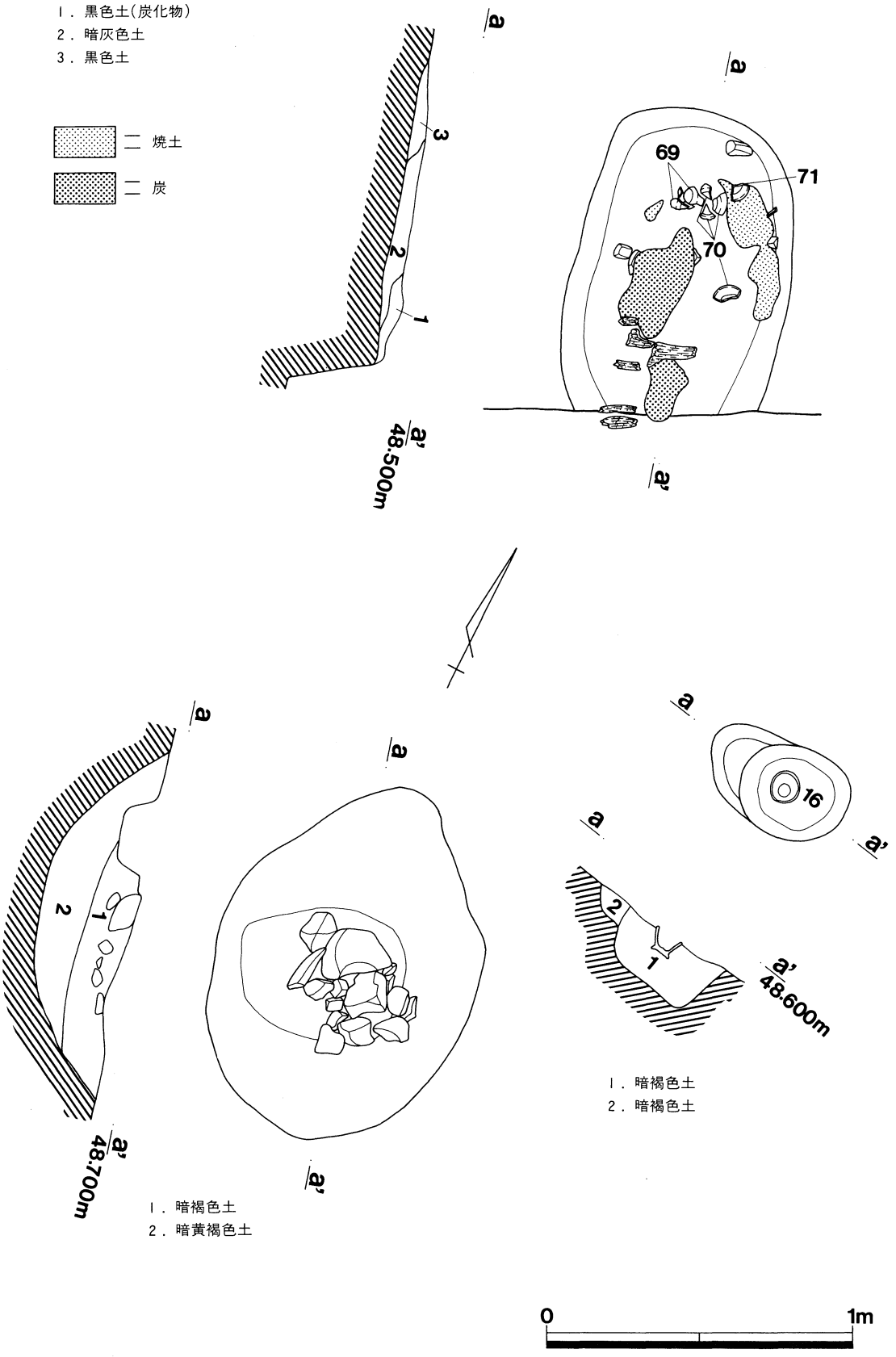
出土遺物は、ほぼ中心から16個の礫が密集して出土した。礫は、いづれも焼けていなかった。覆土中には、小量の炭化物を確認している。

ＳＰ１８３（第８図参照）

Ｄ－４区、ＳＢ０４の西側に検出した小穴である。

平面の形状は楕円形であるが、土器の出土した直下の掘り方のみを観ると不整円形である。穴の大きさは、長径50cm・短径30cm・確認面からの深さ20cmを測る。長軸方位は、Ｎ－80°－Ｗを測る。

覆土はいづれも暗褐色土で、中から第14図16に示した台付甕形土器の台の部分が出土した。時期は、弥生時代後期から古墳時代前期に属するものである。



第8図　ＳＦ０１・ＳＰ１２４・ＳＰ１８３実測図

(iv) 溝状遺構

ＳＤ０１（第９図参照）

行人塚古墳の後円部周溝で、調査区の南側に検出・確認した。

周溝の幅は東側で最も広く10m40cm前後・西側くびれ部に近づくに従い細くなり６m程を測る。溝の下場による計測では、東側で９m20cm前後・西側くびれ部付近で５m20cm～５m80cmを測る。溝底の状況は、ほぼ平坦を成すが一部凹地により低くなるところがある。溝の断面によると、後円部側で掘り方が急傾斜を成し、外側で比較的緩やかに立ち上がる形状を確認する。これは、これまでの調査で確認した状況と同じである。

溝内覆土は、上層に礫混じりの黒色土・下層に礫混じりの暗褐色土が基本の層序である。遺物は、主に黒色土から礫と共に、弥生時代後期ならびに古墳時代前期に属する土器破片が多量に出土した(第14図19～第15図30参照)。これらはいづれも周辺の女高遺跡に関連する遺物で、古墳に関連する遺物ではない。

ＳＤ０３（第10図参照）

調査区の東域Ａ－１～Ｂ－７区に検出。調査区の南東から北西方向に確認した溝で、公図上の赤道と並走していることから道状遺構と考えたい。

確認面での幅は２m～２m80cmで、下場幅は80cm～１m20cm、確認面からの深さ30～80cmを測る。

覆土は概ね３層で構成されており、いづれにもローム粒が均一に混在しておりしまりのない土であった。出土遺物は第14図17・18あるが、近世以降の道状遺構と考えている。

ＳＤ０５（第11図・第12図参照）

Ｂ～Ｄ－１区で、ＳＤ０１の下において検出した溝で、ＳＤ０６と並走した状況で検出した。

確認した長さは14m70cmで、確認面からの深さは最も深いところで60cm・浅いところで20cmを計り、西に向かうほど浅くなる。

東寄りの平面的に円形となる部分（Ｃ－１区）には、東西４m50cm南北３m50cmの範囲で拳代の大きさの礫を多量に含む黒色土が分布していた。この直下の暗褐色土中から、第15図36・37の土器が第12図に示した状態で出土した。完形土器が含まれていることから、古墳時代前期の掘削溝であると考えられる。しかし、機能については、不明である。

ＳＤ０６（第11図・第12図参照）

Ｂ～Ｄ－１～２区で、ＳＤ０１の下において検出した溝で、ＳＤ０５と並走する状況で検出した。

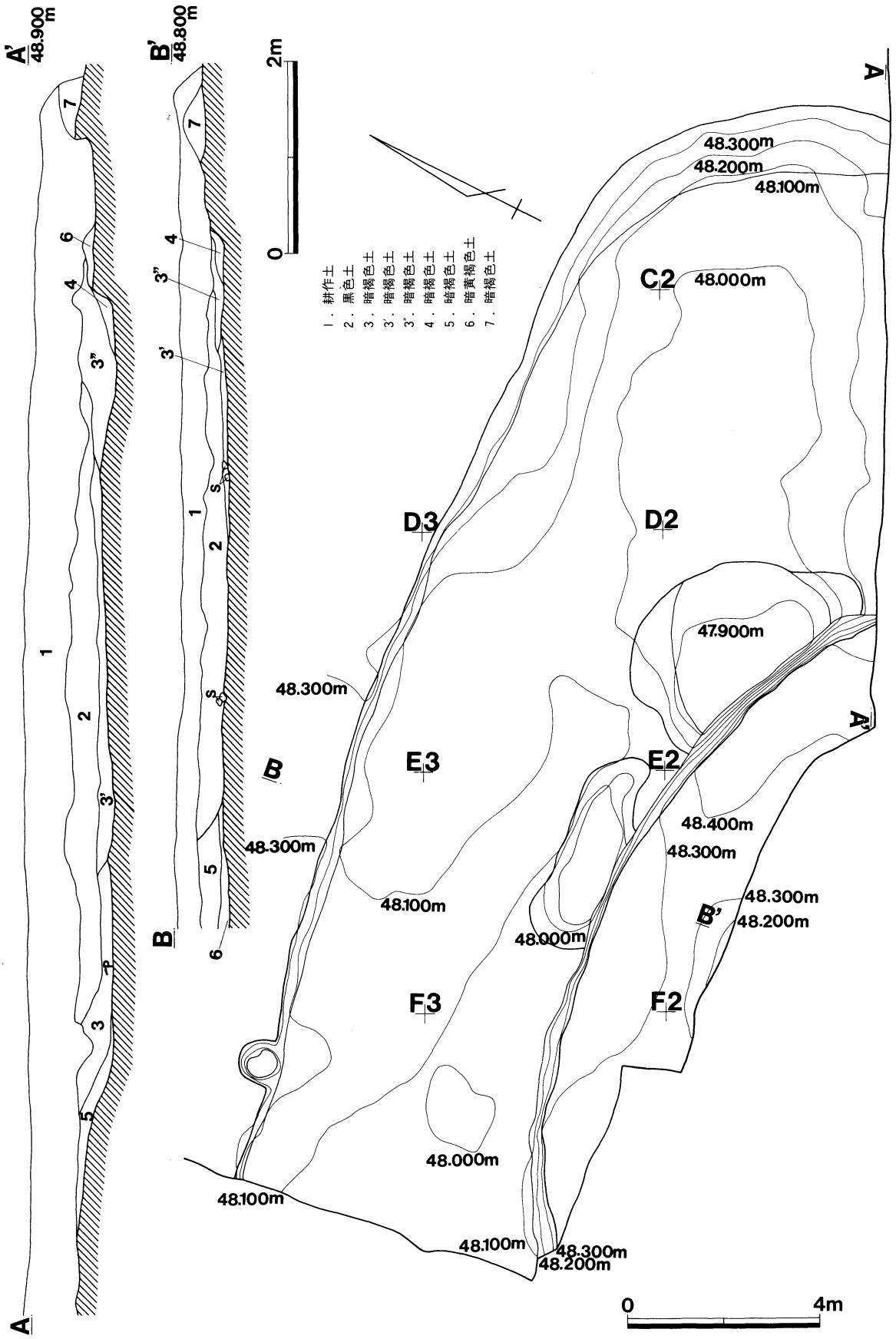
確認した長さは13m60cmで、幅は東側で１m65cm西側で２m90cm、確認面での深さは西側で深く30～40cmを測り東側に向かうほど浅くなる。

出土遺物は礫が中心で、若干の土器が混在した（第15図38～40)。覆土は、概ね３層で構成されてていた。

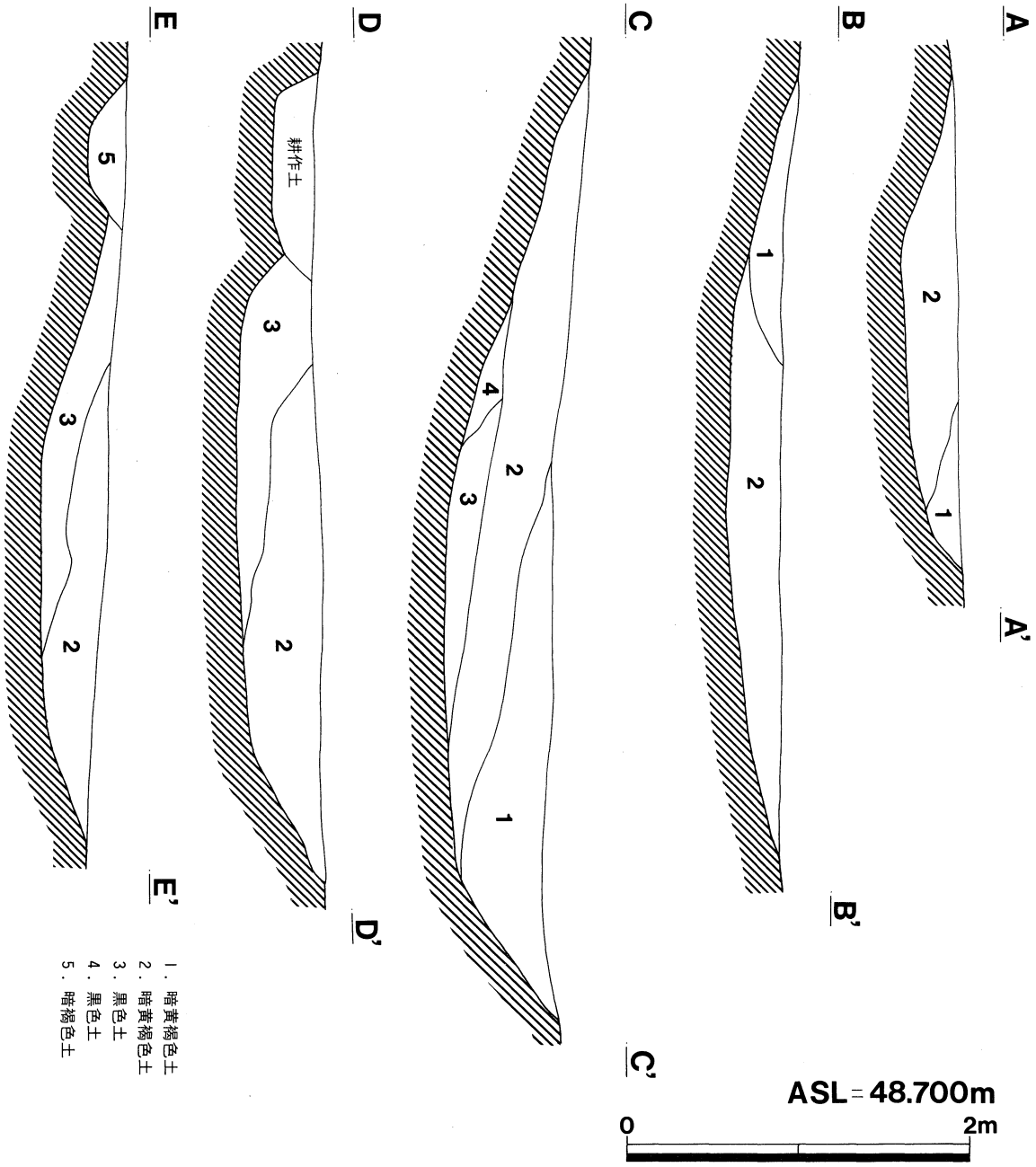
ＳＤ０７（第13図参照）

調査区北側半分に近い広さで、Ｃ～Ｆ－４～８区の広い範囲に検出した。

溝は、調査区西壁から出Ｅ－５杭で直角に北に向きを変え、調査区北壁付近で西に直角に向きを変える。


A'
48.900m
B'
48.800m
2m
0
1．耕作土
2．黒色土
3．暗褐色土
3'．暗褐色土
3"．暗褐色土
4．暗褐色土
5．暗褐色土
6．暗黄褐色土
7．暗褐色土
A
A'
B
B'
48.300m
48.200m
48.100m
C2
48.000m
D3
D2
47.900m
E3
E2
48.400m
F3
F2
0
4m

第９図　ＳＤ０１実測図



第10図　ＳＤ０３土層断面図

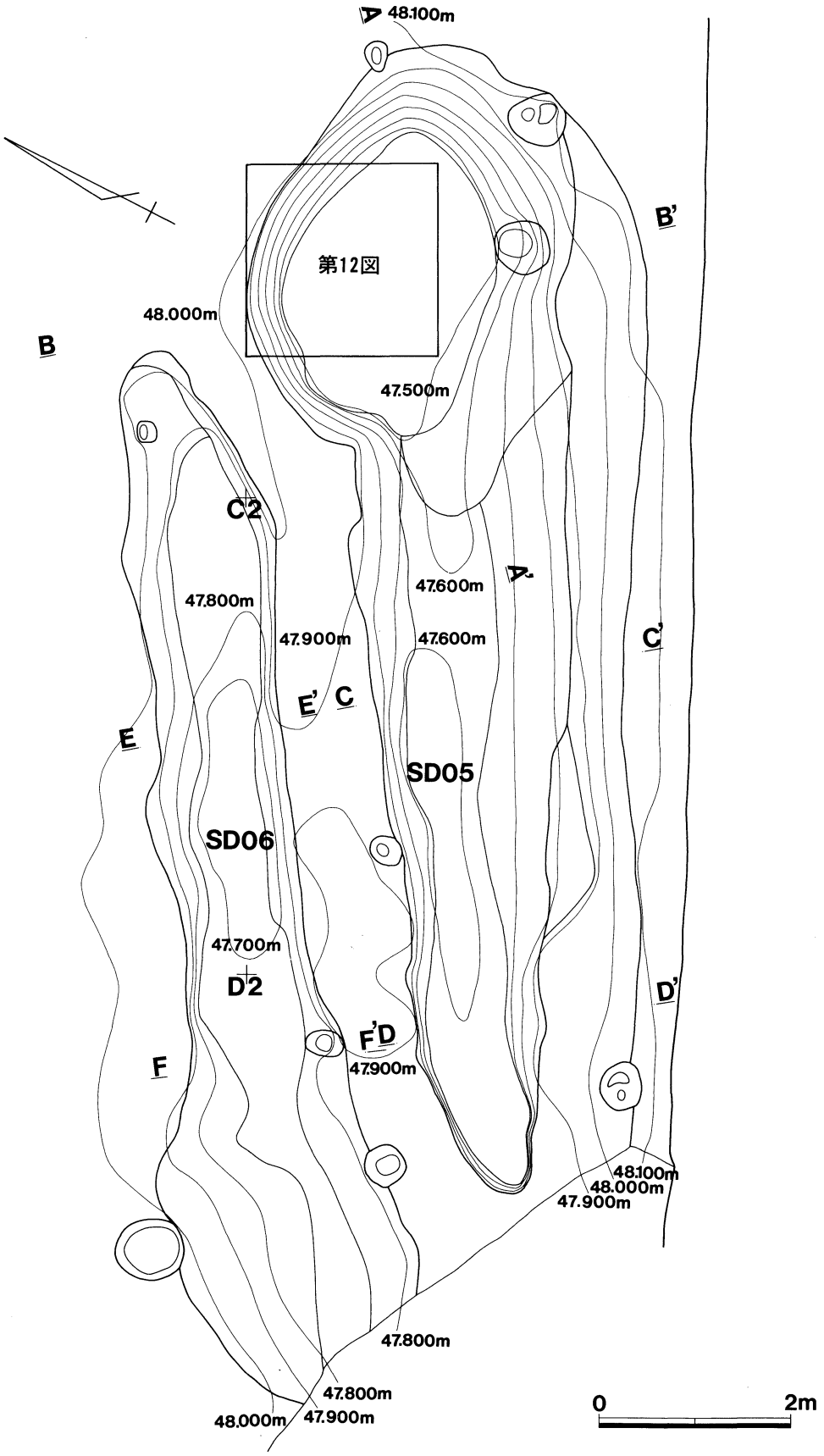
溝の断面の状況は、内側方台部側で急峻な立ち上がりが観られ、外側ではやや緩やかに立ち上がる状況が観てとれる。溝内の状況は、南北それぞれの地域で深まりが認められ、Ｃ～Ｄ－６区では他に比べ浅くなる。深いところでは、40cm強の深さを測る。

溝内の覆土は、上層に礫を多く混在する黒色土・下層に礫混在の暗褐色土の２層により構成される。

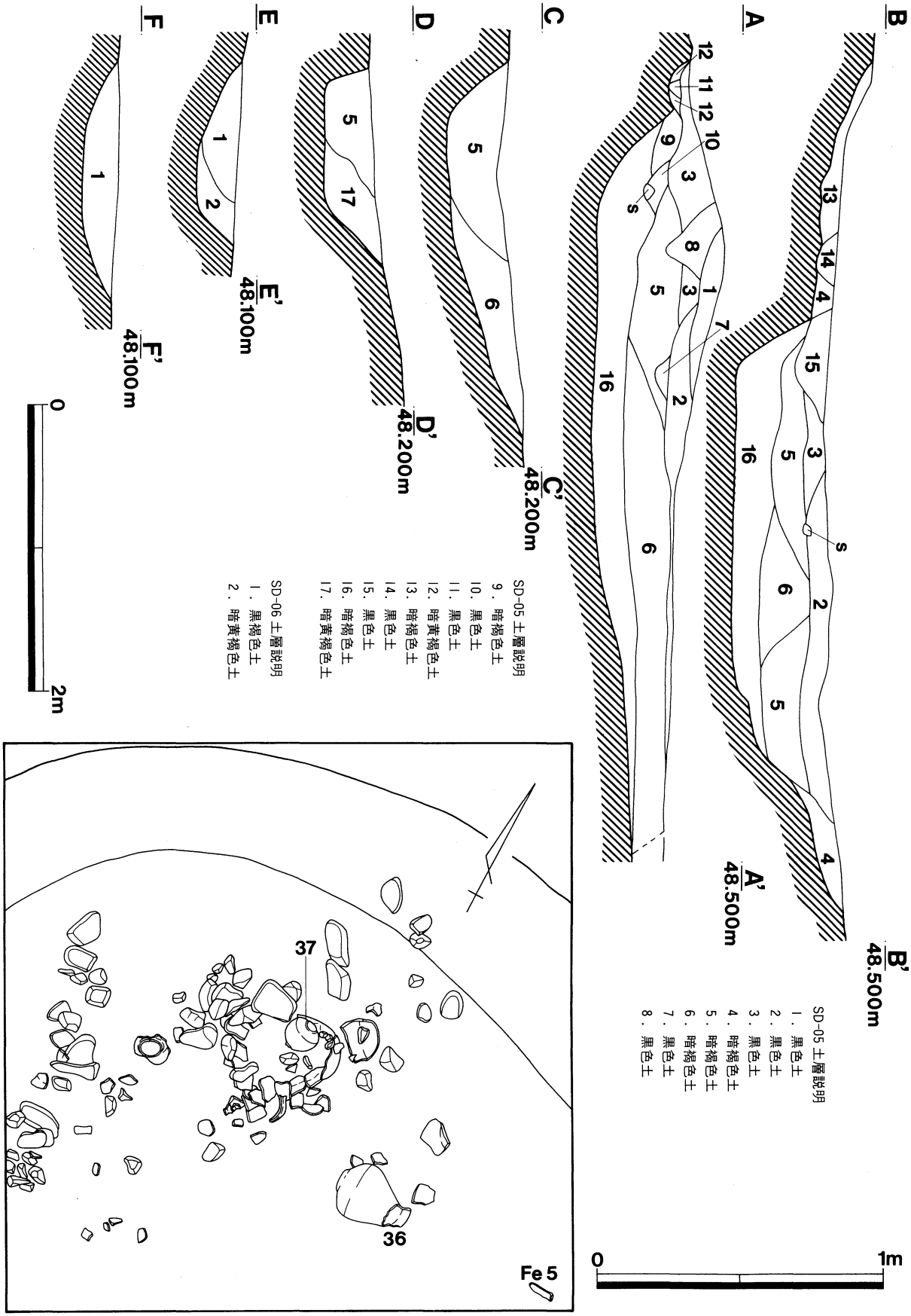
出土遺物は主に黒色土からの出土で、第15図41～67に示したような土器の破片が多量に出土している。

また、第17図３の鉄製刀子がＦ－４区黒色土下層から出土している。

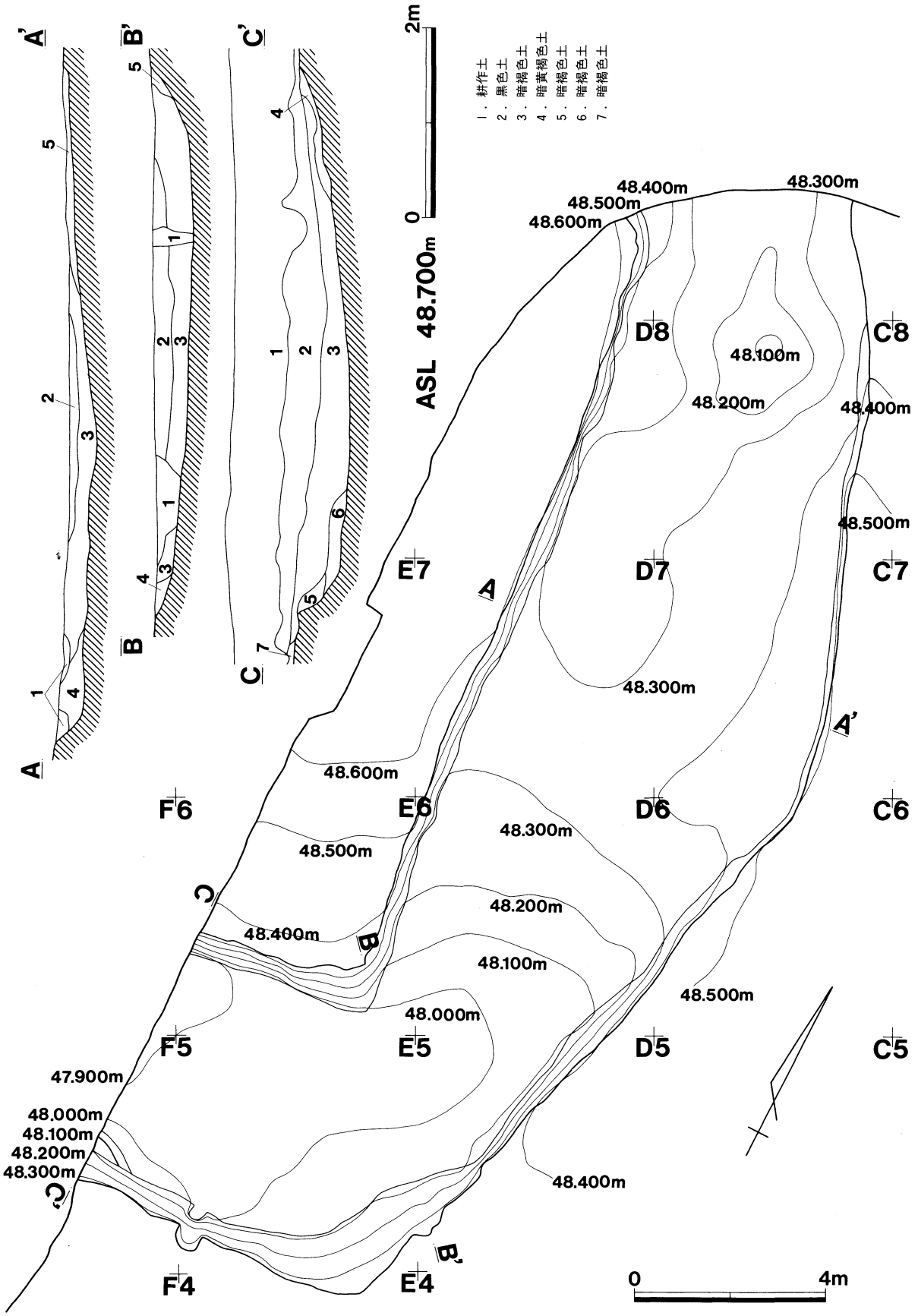
後に述べるように、ＳＤ０７は大きさ・形状から方形状の古墳に伴う周溝と考えられる溝である。ただ、その構築時期を決定するような遺物は出土していない。



第11図　ＳＤ０５・ＳＤ０６平面実測図



第12図　ＳＤ０５・ＳＤ０６実測図



第13図　ＳＤ０７実測図

2．遺　物（第14図～第17図参照）

今回の調査で出土した遺物は、土器・鉄製品・古銭である。総量的には決して多いものではないが、図化に耐え得るものは可能な限り図示し掲載した。ここでは土器鉄製品・古銭の順で説明していく。

(i) 土　　器

出土土器を時代的に観ていくと、弥生時代後期（菊川式）～古墳時代前期に属されるものが大半を占める。以下番号順に説明していく。

１～７はＳＢ０１からの出土である。１～３は同一土器と考えられ、１は二重口縁を成す壺形土器の口縁部片、２はその頸部片、３はその底部片である。口唇部はナデが、口縁部は横ハケが施される。頸部は縦ハケが施されるが、一部ナデ消される。底部外面は剝離が著しいが、内面にはハケが認められる。４は折り返し口縁を成す壺形土器の口縁部で、口縁部の側面が横ナデされている他はハケが施される。５～７は壺形土器の底部片である。５は内外面ともに剝離が著しい。６の外面は縦ハケ後ミガキ、内面はハケが施される。７の外面はミガキ、内面はハケが施される。８～１０はＳＢ０２からの出土である。８は壺形土器の口縁部片で、口唇部の坦面に単節（ＲＬ）斜縄文とキザミが施される。９は高杯形土器の底部片である。外面はハケ後ミガキが施される。脚台部には三方にスカシを有す。１０は高杯形土器の脚台部片である。上部に櫛押圧横線文が６段に亘って施され、三方にスカシを有す。１１～１４はＳＢ０４からの出土である。１１は壺形土器の肩部片である。櫛刺突羽状文を施し、円形浮文がその上に貼付される。１２は台付甕形土器であるが、脚台部を欠損する。口唇部の坦面に明瞭なキザミを施す。口縁部は縦ハケ、胴部には横・斜位のハケが施される。内面には口縁部でハケ、胴部はナデ・板ナデが施される。また棒状工具による引っ掻き痕が所々に認められる。１３は台付甕形土器であるが、胴部下半を欠損する。口縁部には縦ハケ、胴部には斜位のハケが施される。内面は口縁部で斜位のハケが施されるが、胴部はほとんど剝離している。１４は台付甕形土器の口縁部片である。口唇部の坦面に明瞭なキザミを施す。口縁部には縦ハケ、胴部には斜位のハケが施される。内面には口縁部で横ハケが施される。１５はＳＰ０５出土の小型の壺形土器で、口縁部を欠損する。胴部下半に明瞭な稜を有す。胴部下半はミガキ、底部付近ではハケ後一部ナデ消しされる。１６はＳ１８３出土の台付甕形土器の脚台部片で、上部にはハケ、下部には横ナデが施される。内面も同様である。１７・１８はＳＤ０３からの出土である。１７は高杯形土器の脚台部片で、接合部の断面三角形の突出部に櫛刺突羽状文を施す。その他は縦ハケが施される。１９～３０はＳＤ０１からの出土である。１９は複合口縁を成す壺形土器の口縁部片である。内外面ともに剝離が著しいが、口縁部には棒状沈線文が３本認められる。20は壺形土器の頸部片である。上部はハケ後一部ナデ消され、下部は櫛刺突羽状文が施される。内面はナデられている。２１～２６は壺形土器の肩部片である。２１・２２は櫛描波状文が施される。２３は単節（ＬＲ）斜縄文とＳ字状結節縄文が施される。２４～２６はいずれも櫛刺突羽状文が施され、２４・２６はその上に円形浮文が３個一単位で貼付される。２７は折り返し口縁を成す壺形土器の口縁部片である。口唇部に坦面にヘラ刺突列点文を施す。他はハケ、一部ナデ消される。２８も折り返し口縁を成す壺形土器の口縁部片である。口唇部の坦面にヘラ刺突列点文が施される。内面にはＳ字状結節縄文と単節（ＲＬ）斜縄文が施される。２９は台付甕形土器の脚台部片である。外面上部は斜位のハケ、端部は横ナデが施される。内面は端部が内側に折り返されており、ナデが認められる。３０～３７はＳＤ０５からの出土である。３０は折り返し口縁を成す壺形土器の口縁部片である。口唇部の坦面にナデ調整後棒状浮文を貼付する。その他はハケが施される。内面はＳ字状結節縄文→単節（ＬＲ）斜縄文→ミガキが施される。３１も折り返し口縁を成す壺形土器の口縁部片である。口唇部の坦面にヘラ刺突列点文を施す。

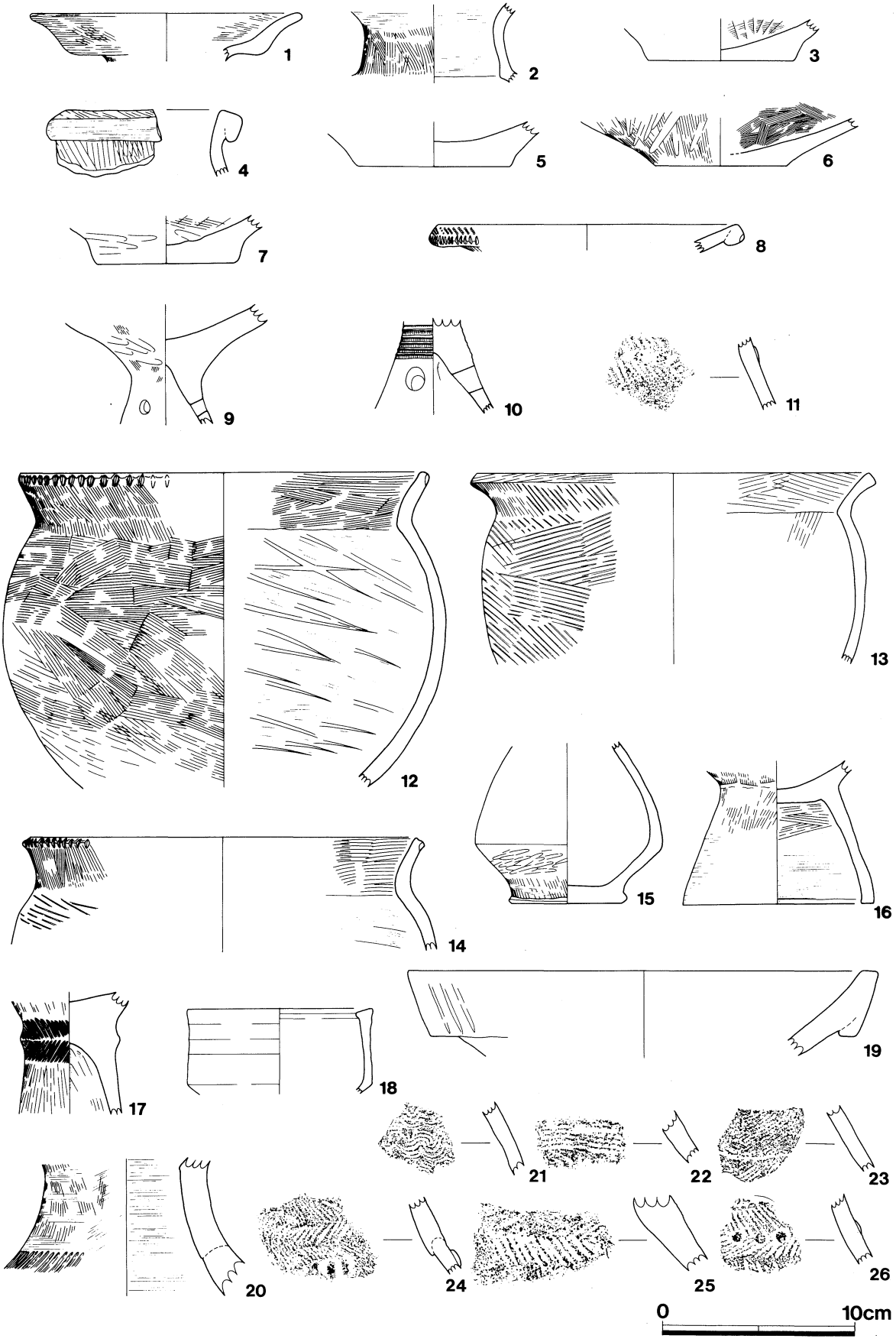
他はハケが施される。内面には単節（ＲＬ）斜縄文が施される。３２は複合口縁を成す壺形土器の口縁部片である。口縁部外面は縦位のミガキ、頸部は縦位のハケが施される。３３～３５は壺形土器の肩部片である。３３は櫛刺突羽状文、３４は櫛刺突羽状文と単節（ＬＲ）斜縄文、３５は単節（ＬＲ）斜縄文が施される。３５にはその上に円形浮文が貼付される。３６は完形の壺形土器である。口縁は短く、胴部はズングリしたプロポーションを呈す。口唇部は横ナデされ頸部から胴上半部にかけては縦・斜位のハケが施される。胴下部半はハケ後ミガキが施される。内面は口縁部でハケ後横ナデ、胴上半でナデ、下半～底部はハケが施される。３７も壺形土器で口縁部を欠損する。胴部上半に最大径を有すが、プロポーションはいびつである。調整は剝離が著しく確認できない。３８は複合口縁を成す壺形土器の口縁部片で、４本の棒状浮文を貼付する。３９は二重口縁を成す壺形土器の口縁部片であるが、剝離が著しく調整は確認できない。４０は壺形土器の底部片で、外面はミガキ、内面は板ナデが施される。４１～４６は壺形土器の口縁～肩部片である。４１・４２・４６は無節斜縄文とＳ字状結節縄文、４３・４４は単節斜縄文とＳ字状結節縄文がそれぞれ施される。頸部ではハケ後ナデ消し、もしくはナデのみが施される。４５は肩部を肥厚させ、そこに単節（ＲＬ）斜縄文を施す。頸部ではハケ後ナデ消している。４７は肩上部に竹管刺突文、その下にはハケが施される。内面はハケが施される。４８～６７はＳＤ０７からの出土である。４８は壺形土器の底部片である。外面は縦ハケ後一部ナデ消される。４９は台付甕形土器の底部片で、上半部と脚台部を欠損する。外面は縦ハケ、内面は板ナデ・横ハケが施される。５０はＳ字状口縁を成す台付甕形土器の底部片で、外面は縦ハケが施される。５１は高杯形土器の底部片で、内外面ともにミガキが施される。５２は高杯形土器の脚部片で、端部を欠損する。四方にスカシを有す。外面は縦ハケ後ミガキ、内面は斜位のハケが施される。５３～５５は単口縁の壺形土器である。５３・５４は口唇部に顕著な横ナデ、口縁部には縦ハケが施される。内面は５３が櫛描波状文、５４がハケ後ナデ消される。５５は内外面ともに顕著な横ナデが施され、頸部にハケが認められる。５６は折り返し口縁を成す壺形土器で、口唇部の坦面にヘラ刺突列点文が施される。内面は櫛描波状文が施される。５７～６４は壺形土器の肩部片である。５７はＳ字状結節縄文・単節（ＲＬ）斜縄文、５８は横ハケ・櫛描波状文、５９は櫛描波状文・櫛刺突羽状文、６０は櫛刺突羽状文・円形浮文、６１は櫛刺突羽状文・Ｓ字状結節縄文、６２・６３は櫛刺突羽状文がそれぞれ施される。６４は外面がヘラ状工具による刺突羽状文、内面がミガキ・横ナデが施される。６５～６７は台付甕形土器の口縁部片である。６５・６６は口唇部の坦面に明瞭なキザミが施される。頸部には縦ハケ、胴部には斜位のハケが施される。内面口縁部は斜位のハケ、胴部はハケ・ナデが施される。６７にはキザミは施されず、ハケのみである。６８はＳＤ０１出土の山茶碗である。口縁部には自然釉が認められる。底部は糸切り後ナデ調整される。高台は低く、籾殻痕がかすかに認められる。６９～７１はＳＦ０１出土のかわらけで、いずれもロクロ成形後ナデが施され、底部には糸切り痕が認められる。

(ii) 鉄　製　品

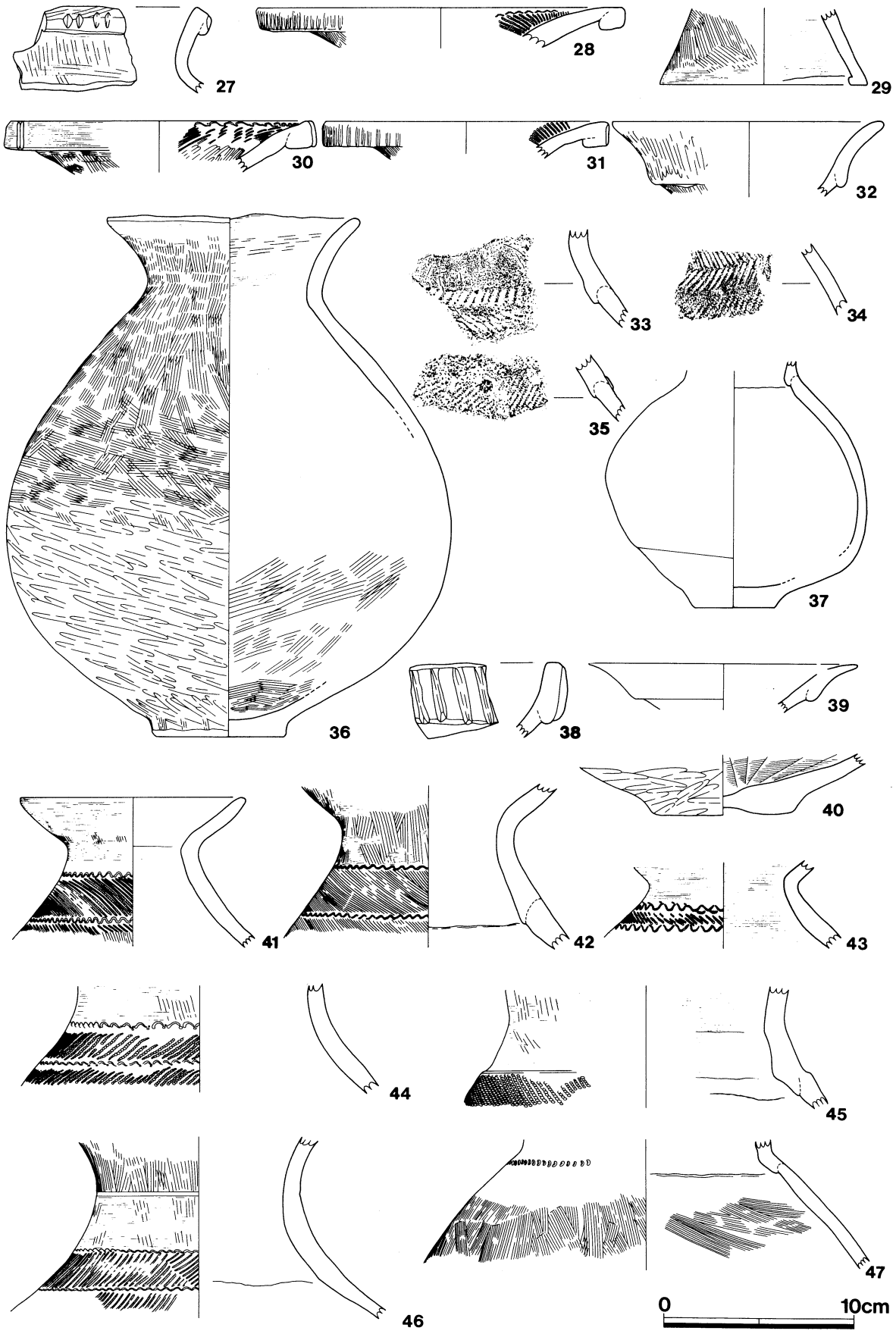
１はＳＢ０２出土の鉄鎌の刃先部分である。２はＳＤ０５出土の刀子で刀身の一部を欠失しているが、現存長16.2cmを測る。刀身の幅は1.7cmを測る。茎部は厚く鉄錆に覆われている。茎部の現存長は2.8cmを測る。３はＳＤ０７出土の刀子で現存長15.5cmを測る。切先部分から関部にかけて刃部は欠落している。４はＳＤ０７出土の用途不明の鉄製品で、縦2.8cm、横4.2cmの鉄板に２本の鉄釘が打たれている。５はＳＤ０７出土の鉄鎌の基部で現存長3.8cmを測る。折り曲げ部分の長さ0.7cmを測る。

(iii) 古　　銭

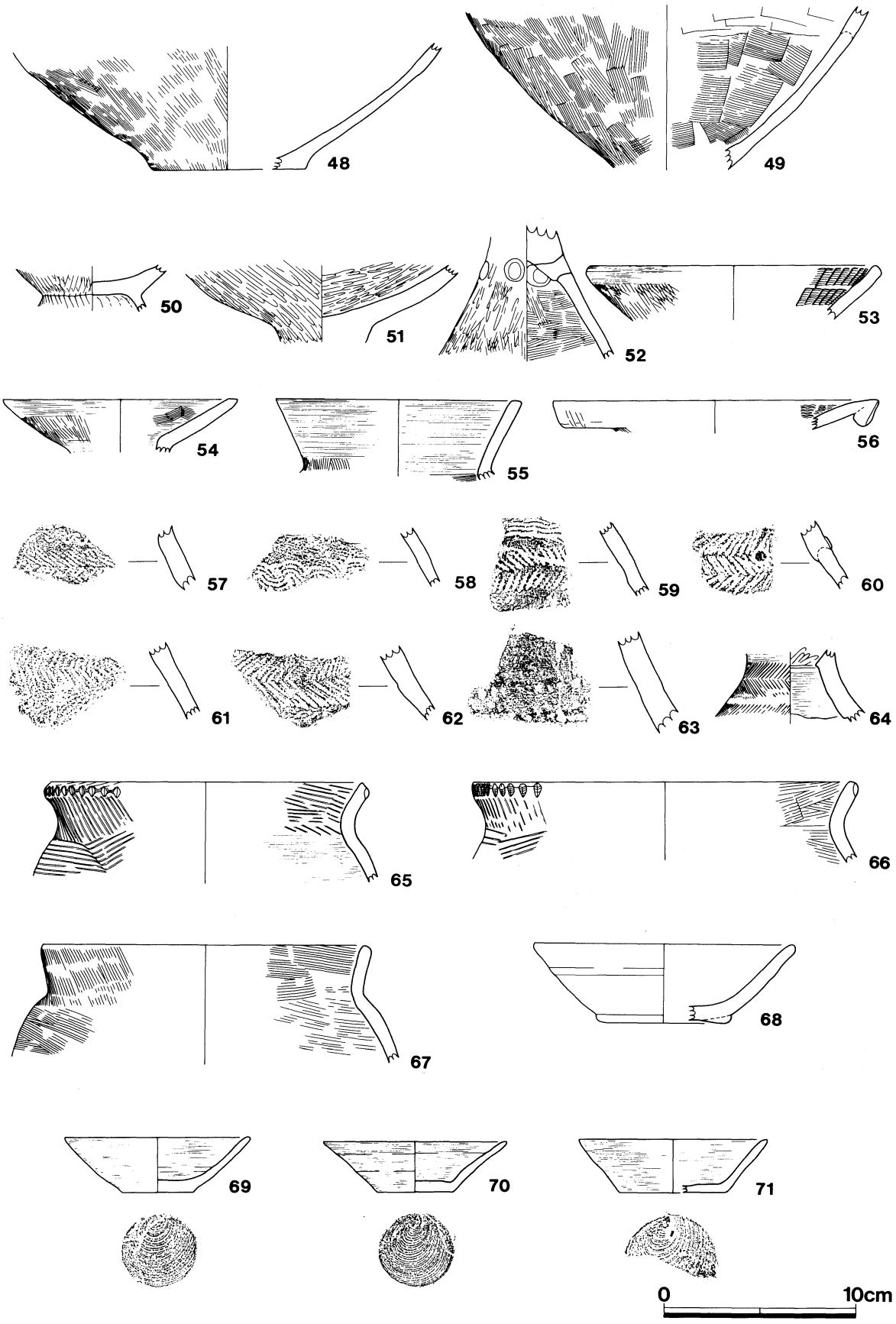
すべて遺構外出土で、そのうち判読可能なものは２枚であった。２は北宋銭（元豊通寶）、３は宗銭（淳化元宝）であるが、６・７も北宋銭（元豊通寶）の可能性がある。１・８は品質が粗悪であることから私鋳銭と考えられる。



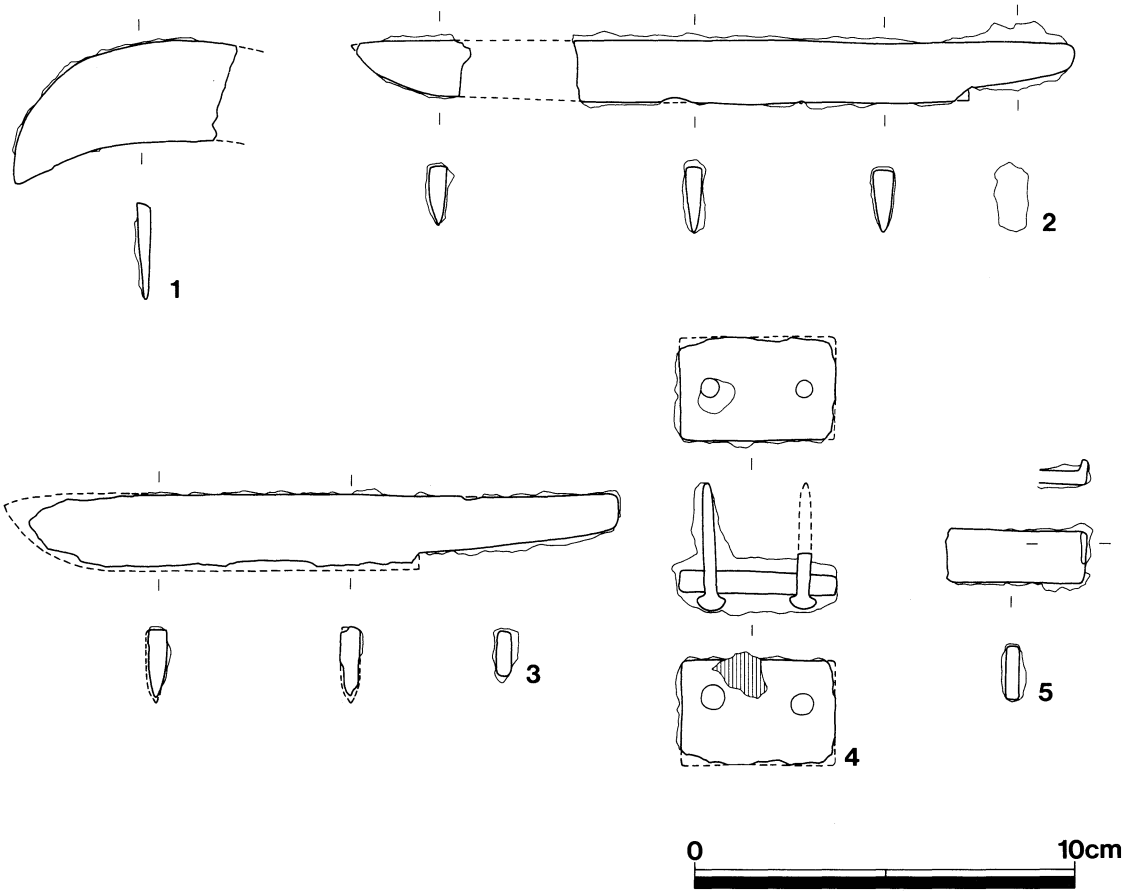
第14図　出土土器実測図(1)

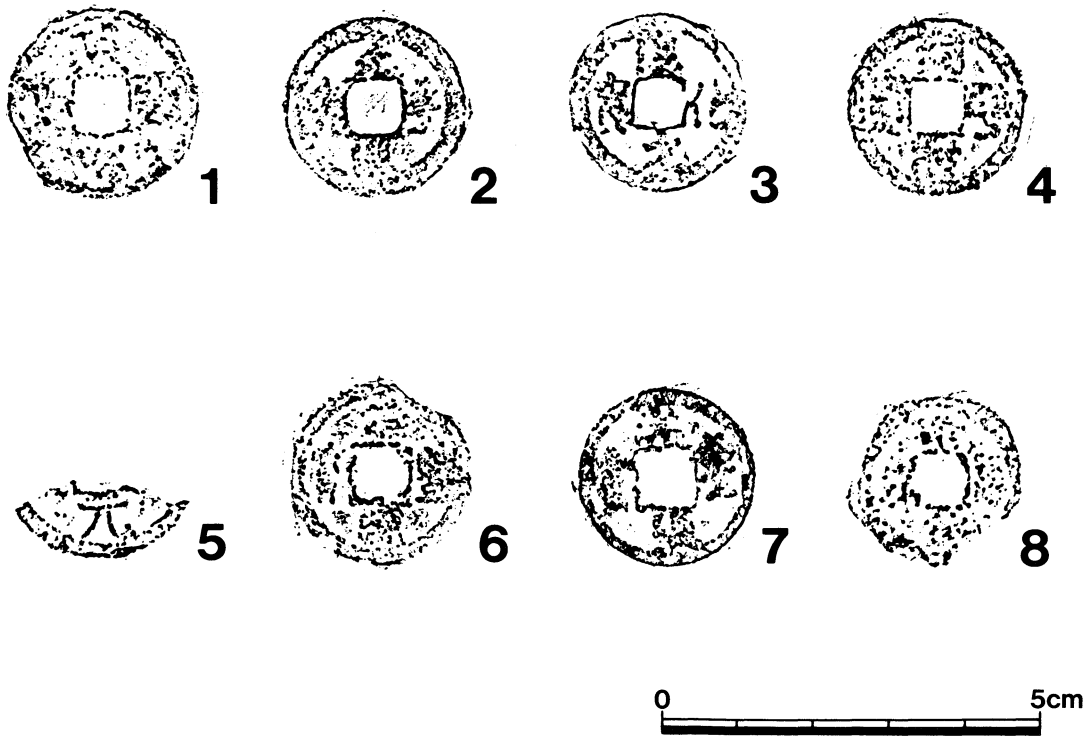


第15図　出土土器実測図(2)



第16図　出土土器実測図(3)





第17図　出土遺物実測図

Ⅲ　ま　と　め

調査の内容の項で述べたように、今回の調査でも多くの成果をあげることができた。ここでは、それらの内でも特に注目されるＳＤ０７の発見と、住居跡に着目しまとめとしたい。

第１に住居跡に着目し、女高遺跡の動態を考えてみたい。

今回の調査では、平面形状四角の竪穴住居跡は検出されず、形のわかる住居跡として唯一ＳＢ０４がある。ＳＢ０４は、出土遺物・住居跡平面形から弥生時代後期に構築された住居跡で、前回の調査で古墳時代前期の土器を出土した四角い住居跡とは明らかに形状を異にしている。第３図を参照して頂きたいが、平面形楕円形の住居跡は比較的行人塚古墳の東側域に多く確認されており、平面形四角の住居跡は古墳の西側域に多く認められるのである。

また出土遺物の内容でも、前回の調査では明らかに古墳時代前期に属すものが出土しているにもかかわらず、東側域からは古墳時代前期でも初頭の時期のものが出土していることが認められる。

以上の２点により想定すると、女高遺跡を営んだ人々の足取りは弥生時代後期から古墳時代前期において、東側段丘東岸部付近に居住していたものが次第に内陸部に移り住んで入ったものと考える。

次に、ＳＤ０７をどう取り扱うかであるが、隣接する行人塚古墳の周溝と比較して検討を加えたい。まず溝の大きさであるが、確認面での幅が南側で５m80㎝東側で最大７m40㎝であり、下場での幅が南側で４m70㎝東側で約７mを測る。この数字を、ＳＤ０１のものと比較して決して劣るものではない。

溝の断面形状であるが、両者を比較して内側の台状部側の立ち上がり方が急峻であるのに対し外側では緩やかに立ち上がるという点で共通する掘り方である。

溝内の状況では、遺構の説明でも述べたとおりＳＤ０７では浅い掘り方を持つ部分があるのに対し、行人塚古墳でも後円部周溝において他と比較して浅くなる部分を持つ（1985年版で報告した）。これまた共通した掘り方である。

次に掘られた溝の土量を計算して、方台部に積み上げてどのくらいの高さの墳丘となるか計算してみたい。検出した溝の範囲が全体の４分の１であることから、方台部への積み上げも４分の１で計算した。溝の深さは地表から換算して約１m（最も深いところで１m20㎝）、一辺の溝平面積は30m×５m＝150㎡で総土量は150㎥となる。確認した状況から方台部の面積は、確認面での一辺の長さ約18mから想定した地表面での一辺の長さが約17mであるから17m×17m÷４＝72.25㎡である。ここに先ほど計算した総土量を積み上げてみると150÷72.25＝約2.08mの高さが求まる。この数字を行人塚古墳の後円部の高さと比較すると、同等の高さであることがわかる。

以上４点の比較検討であるが、ＳＤ０７により想定される構築物は方形状の古墳であると断言してさしさわりのないものと考える。

したがって、ＳＤ０７の検出＝方形状の古墳の発見　このことは和田岡古墳群を考える上で大きな発見であったと考える。

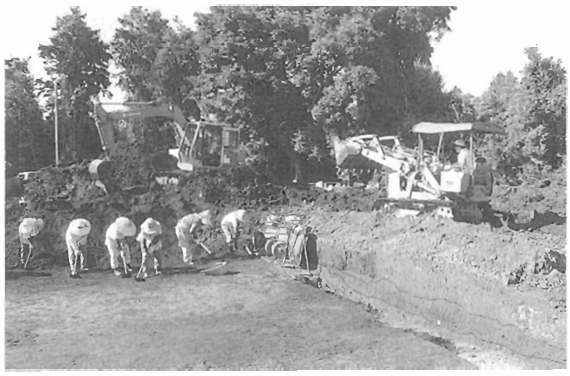
図　　版

調査前近景(北西から)

重機による茶樹抜根

茶樹焼却

重機による掘削

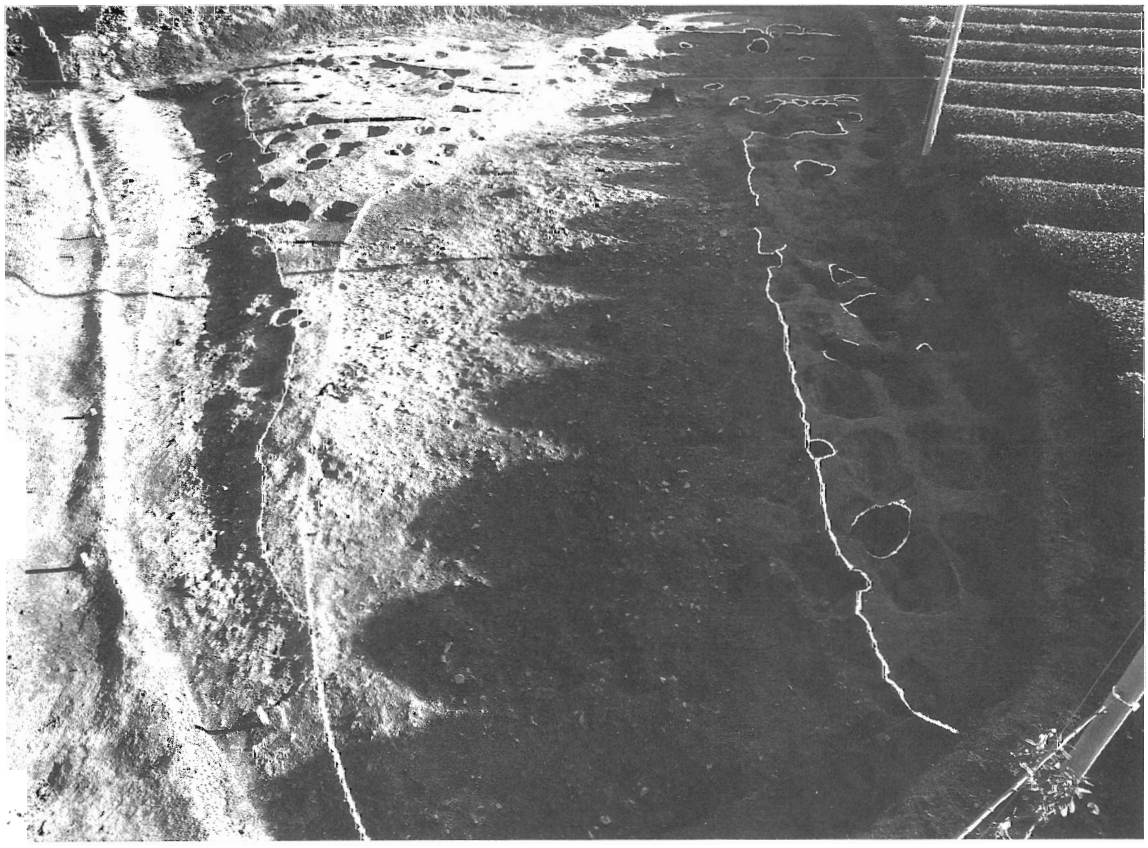


調査風景

南調査区全景(北から)

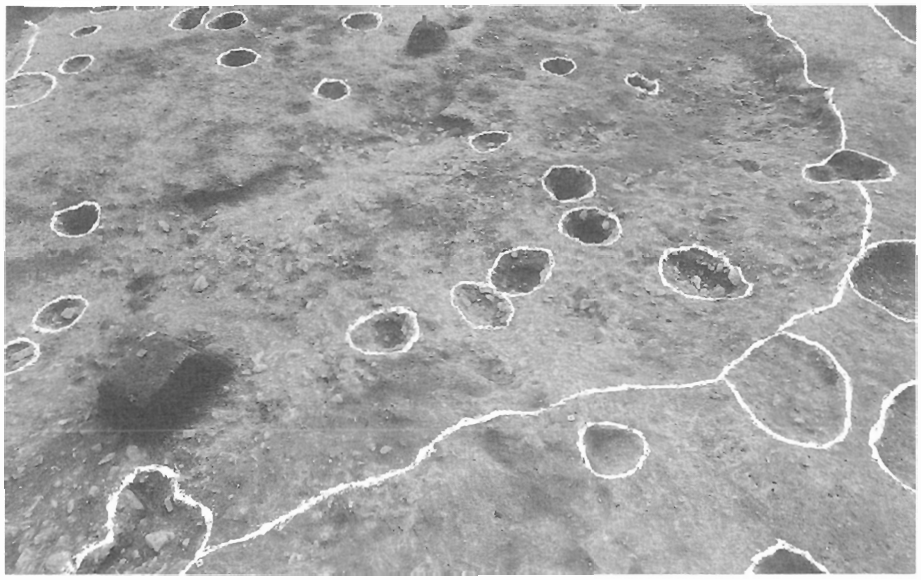
南調査区全景(西から)

北調査区全景（南から）



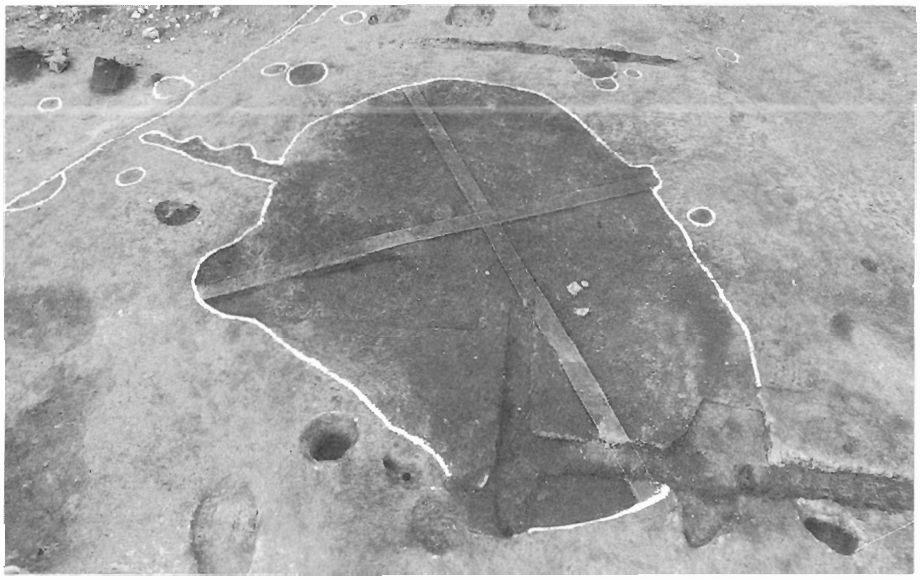
北調査区全景（北から）

重機による埋戻し

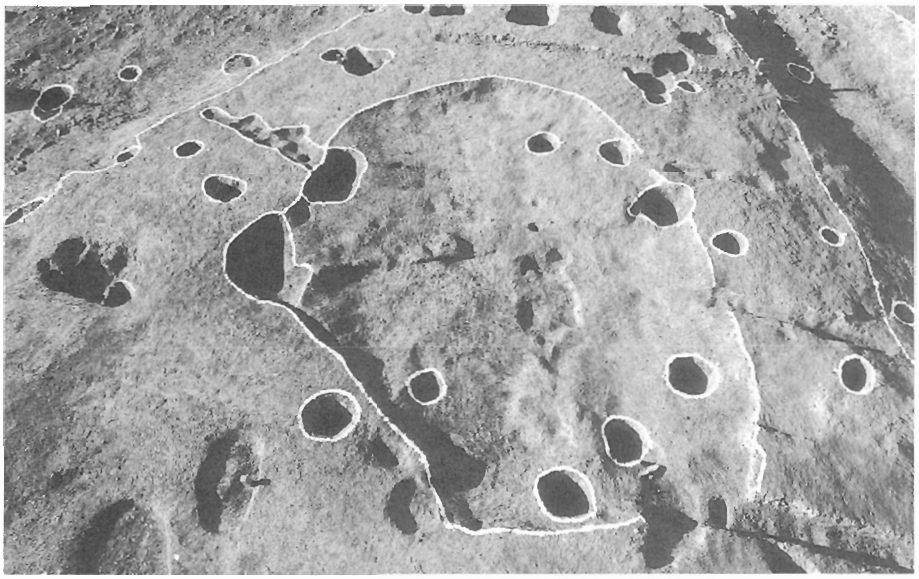


SB01・SB02
（北東から）

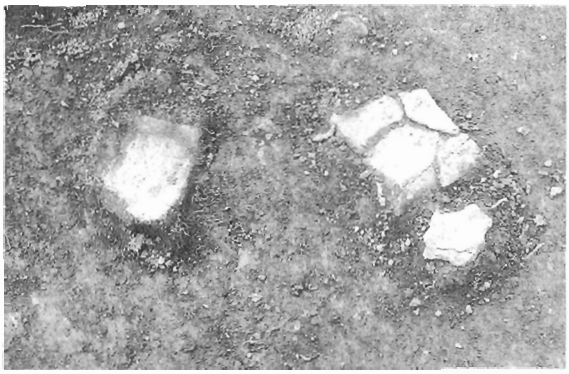
SB01遺物出土状況



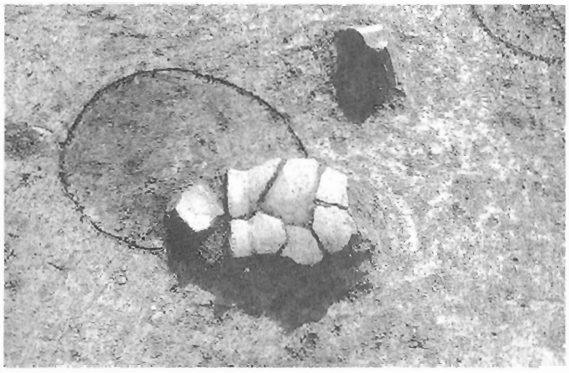
SB04遺物出土状況
（南から）



SB04完掘（南から）

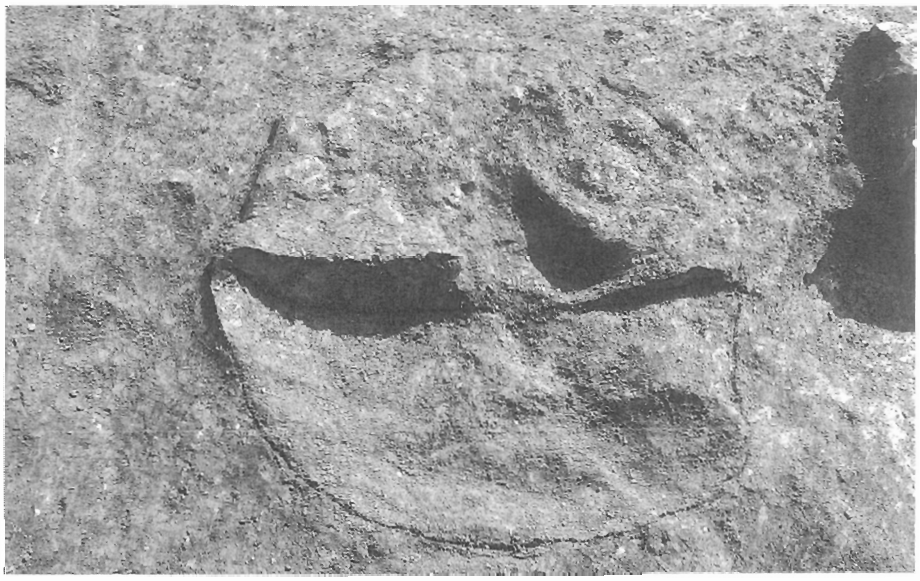


SB04遺物出土状況



SB04遺物出土状況

SB04　炉



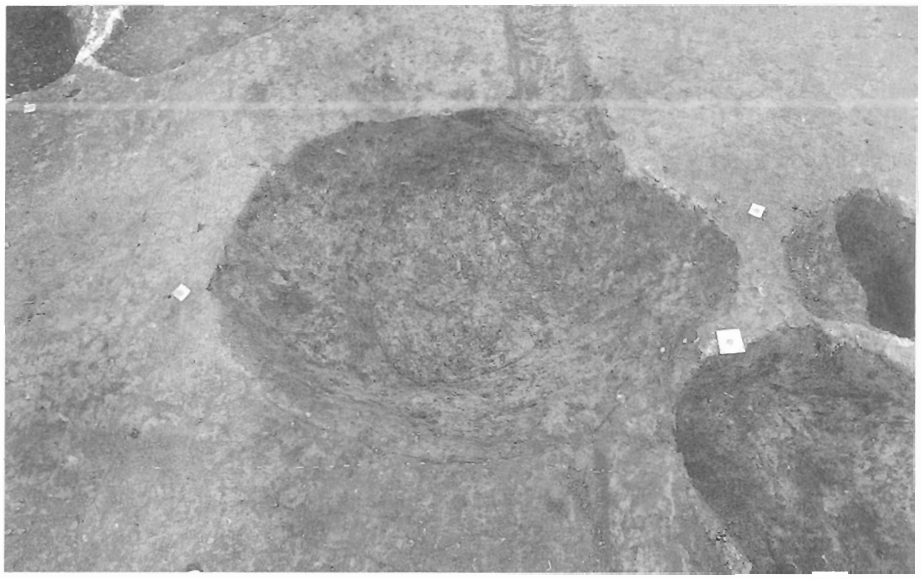
SB04 炉（断面）

SB04 炉（完掘）

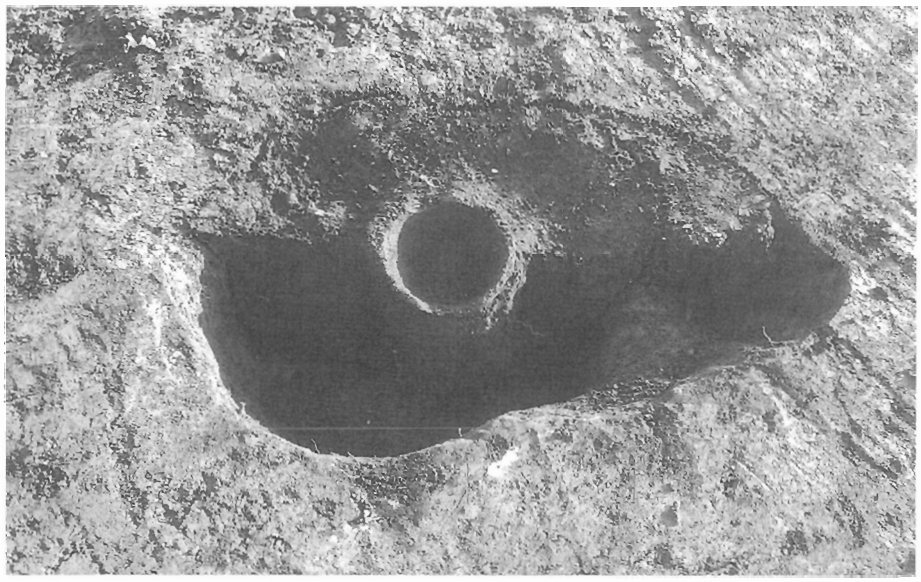
SF01遺物出土状況
（北から）

SF01完　掘
（東から）

SP124遺物出土状況
（東から）



SP124完　掘
（東から）

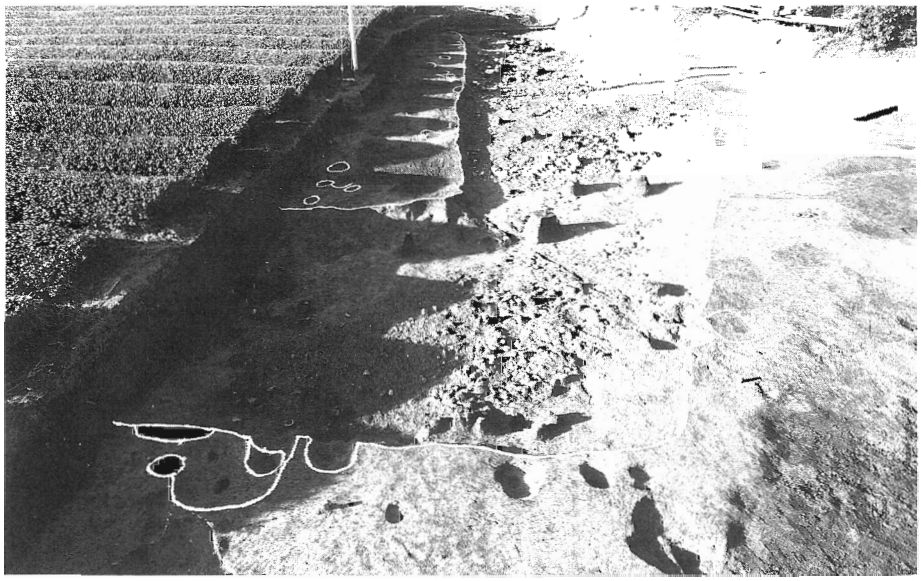


SP183遺物出土状況
（北から）

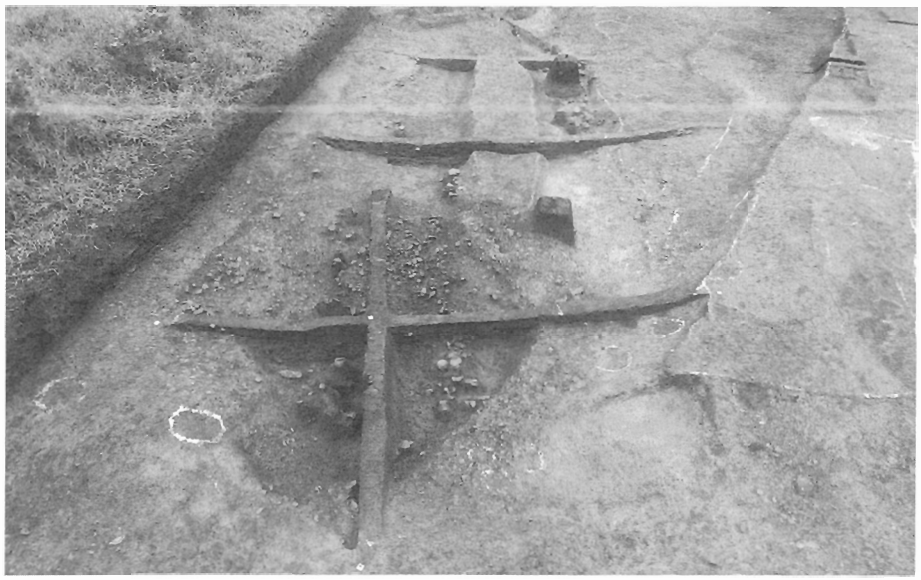
SP183完　掘
（北から）

SD01完　掘
（北から）

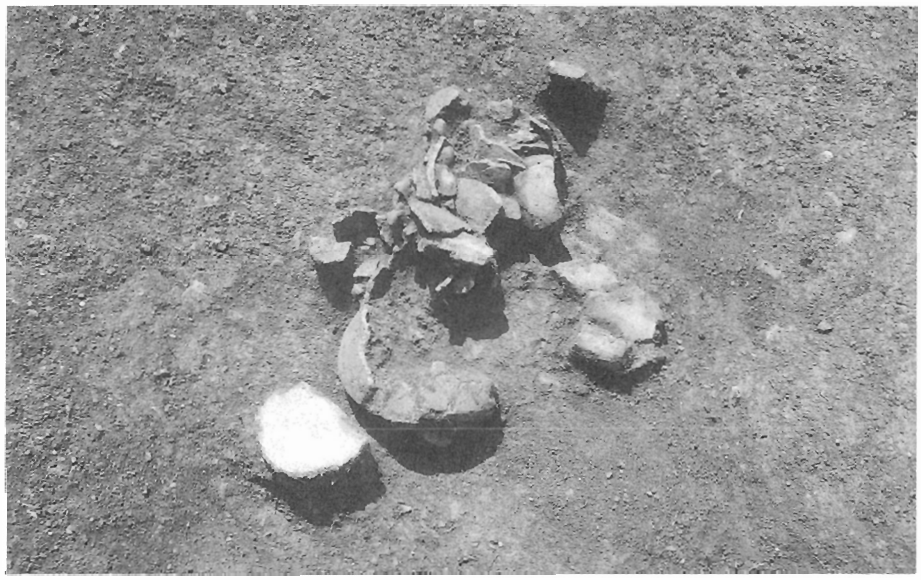
SD03完　掘
（南から）



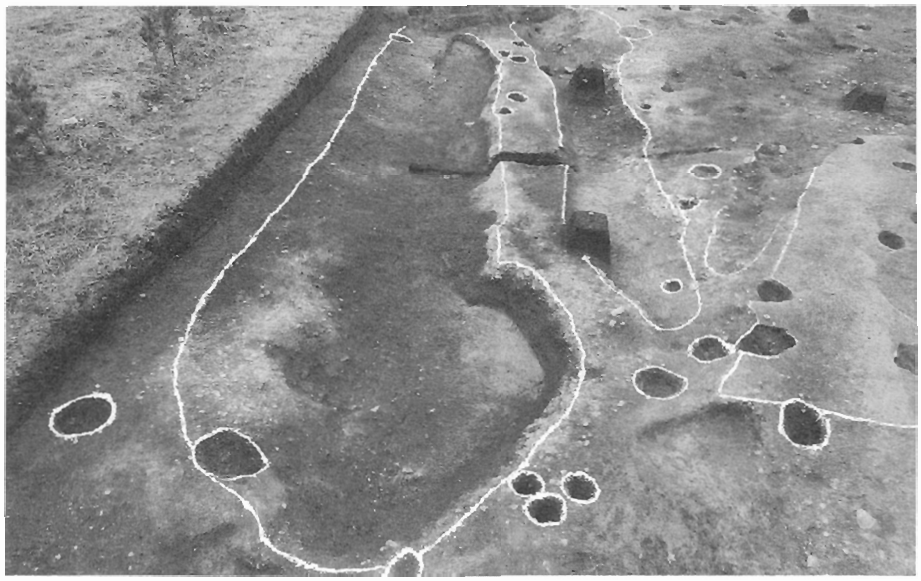
SD07完　掘
（南から）



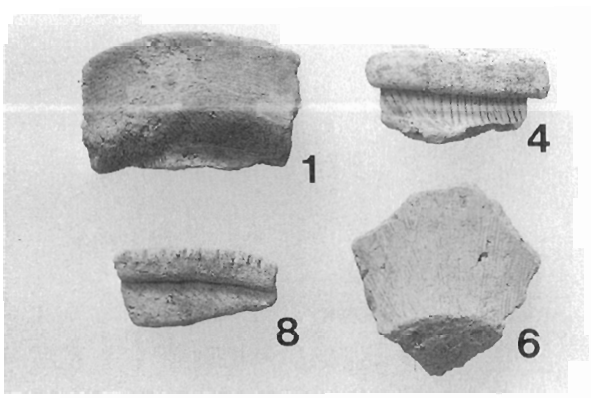
SD05・SD06
遺物出土状況
（東から）

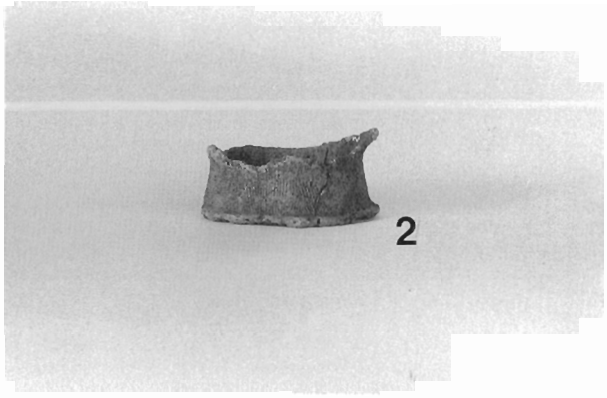


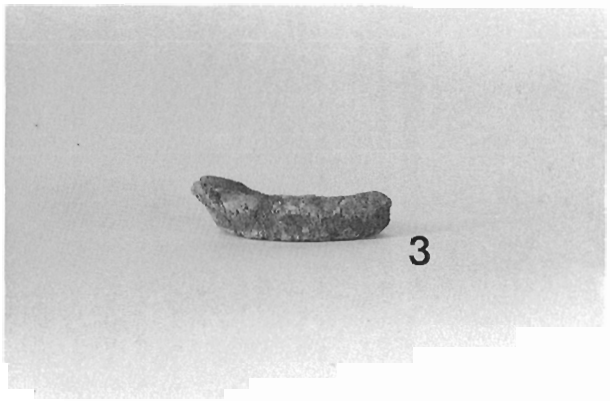
SD05遺物出土状況

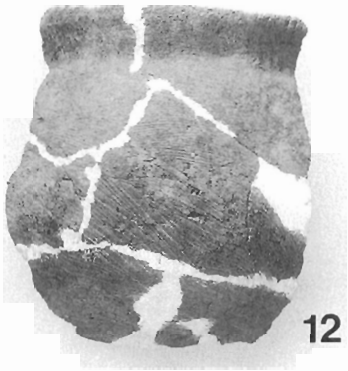


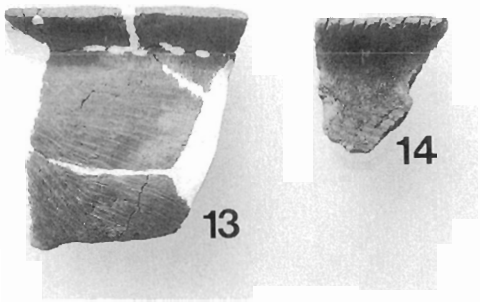
SD05・SD06完掘
（東から）

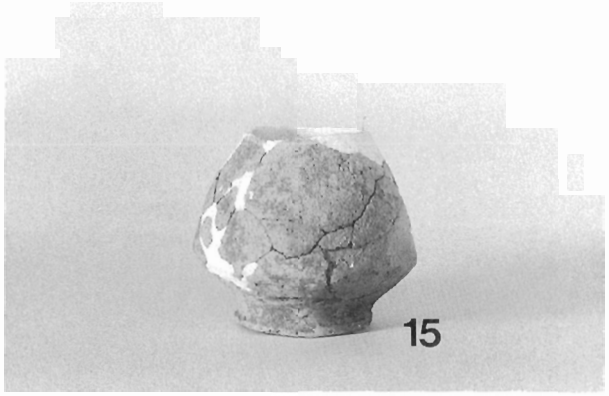


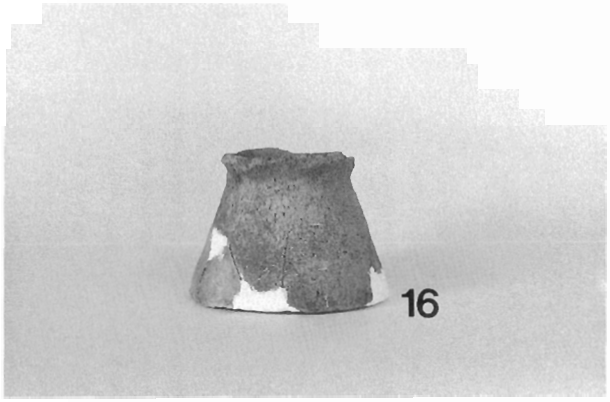


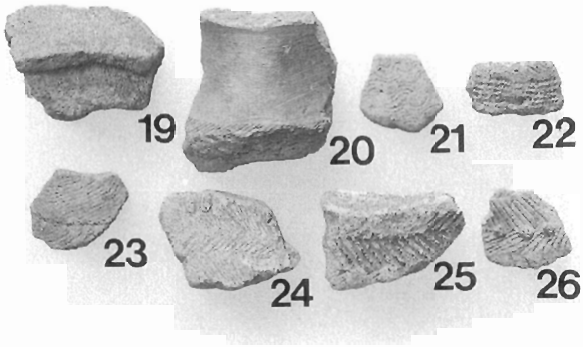




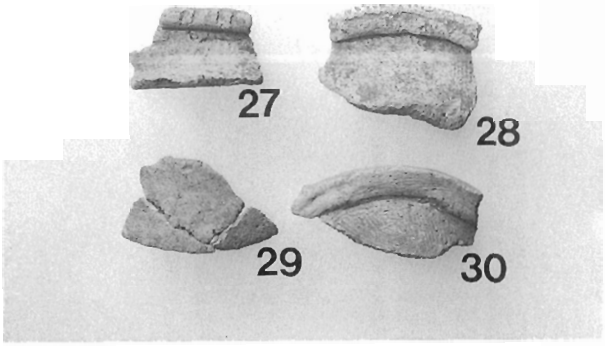


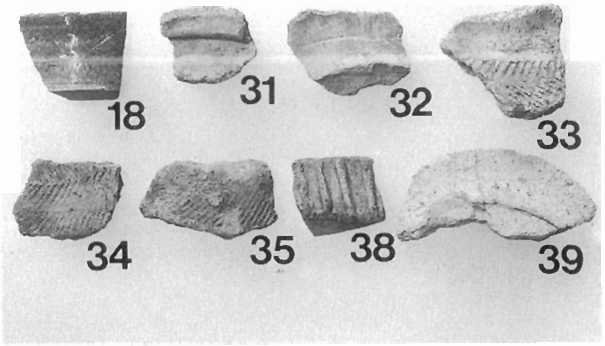


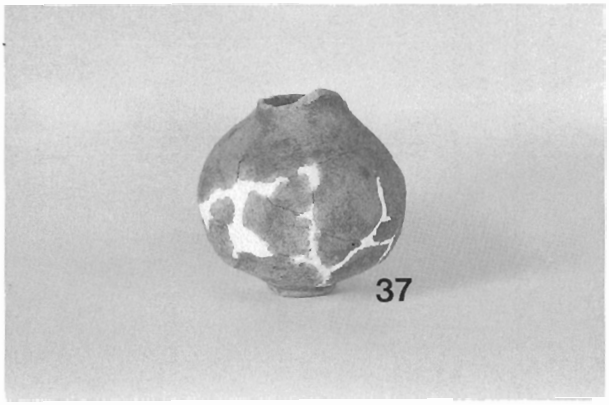


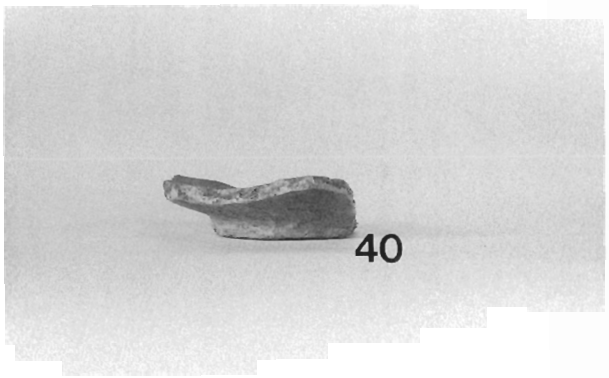


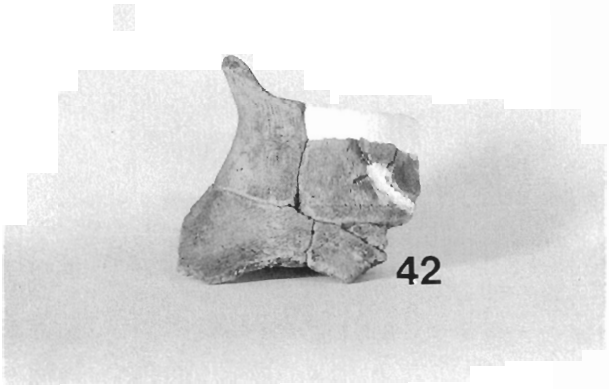
出土遺物(1)

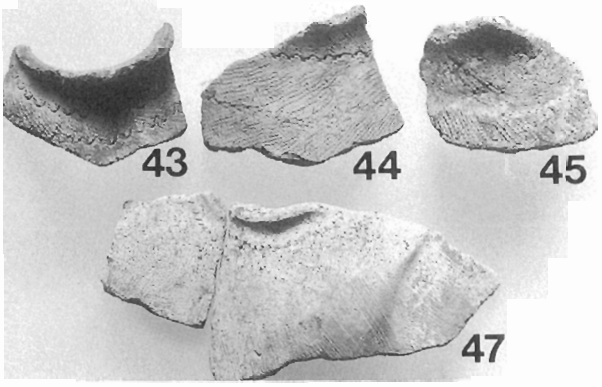




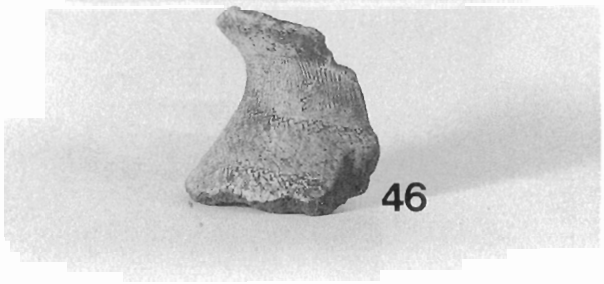


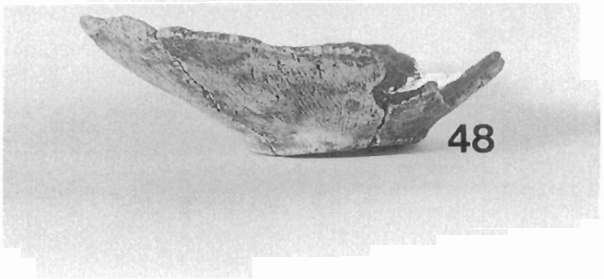


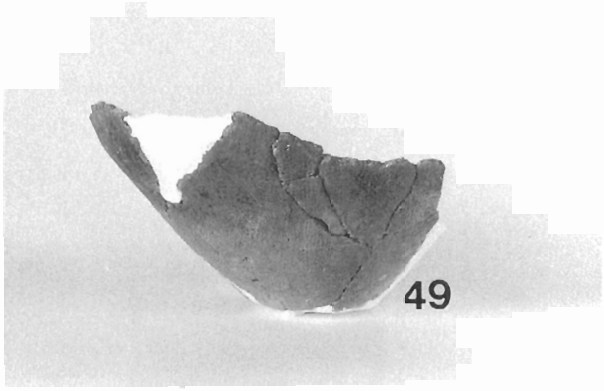


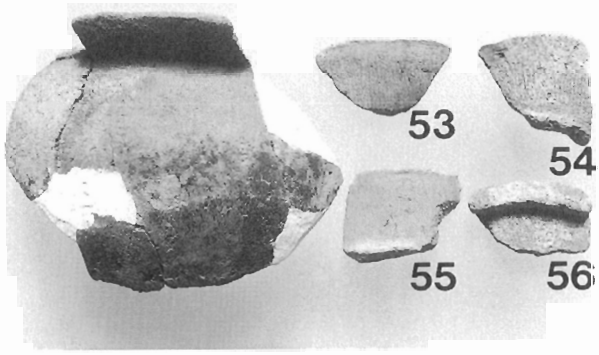


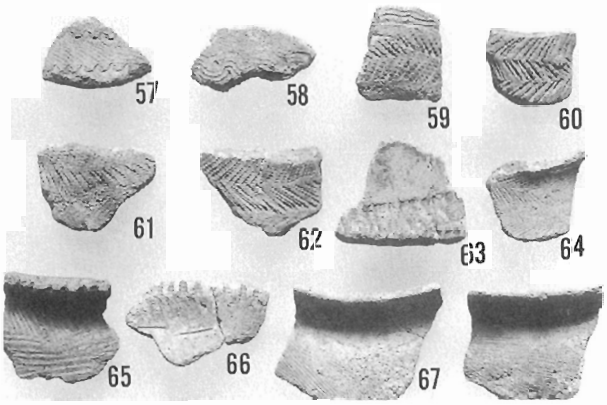
出土遺物(2)

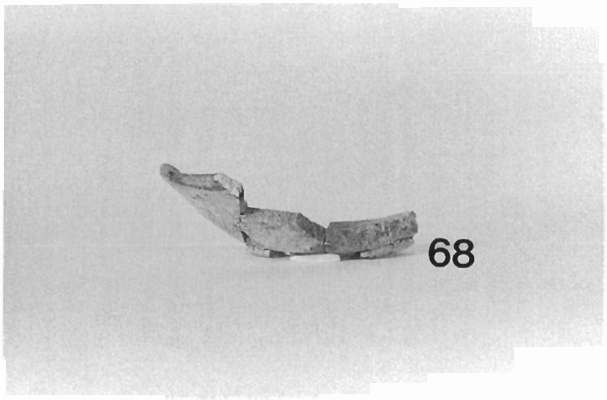


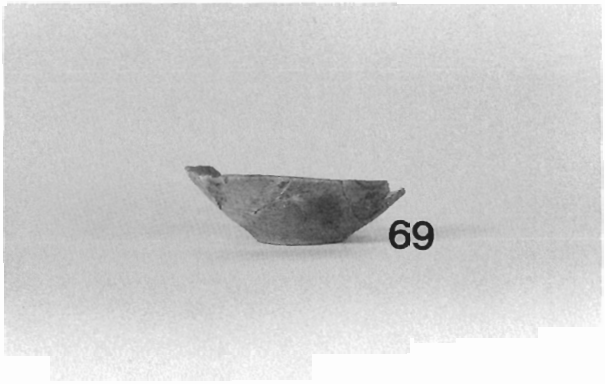




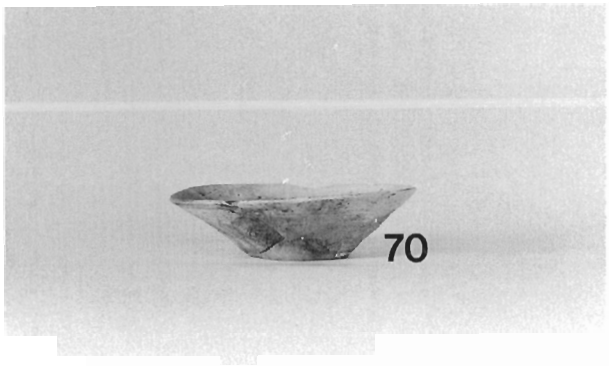


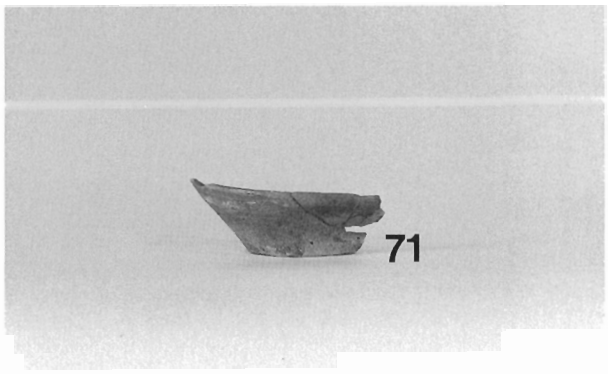


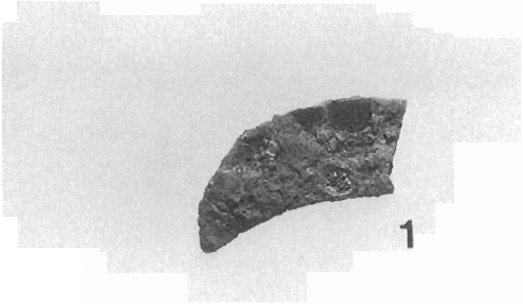


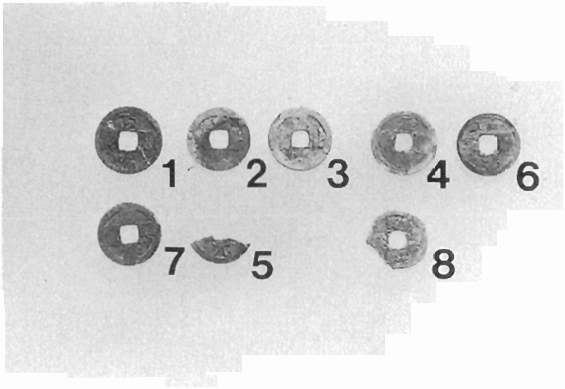


出土遺物(3)









出土遺物(4)

女高遺跡・行人塚古墳

発掘調査報告書

1990年３月31日

編集発行　掛川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (0537)24－7773

印刷所　株式会社　三　創
静岡市中村町166－1
TEL (0542)82－4031